

F13-Ko16ウ



1200500762480

F13

6

1690

運 命

幸田露伴著

岩波書店



始

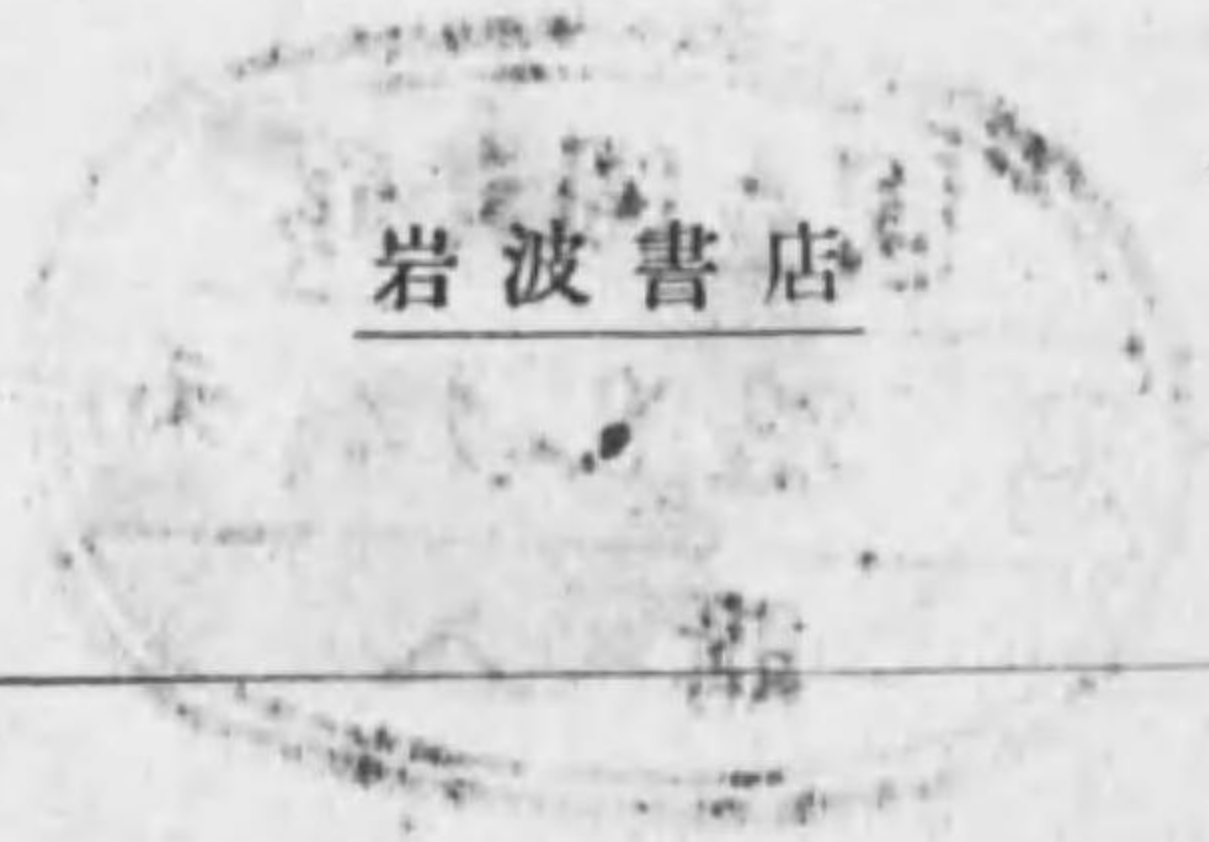


F 13
K. 16



岩波文庫
1690
運 命

幸田露伴著



岩波書店

運

命



世おのづから數といふもの有りや。有りといへば有るが如く、無しと爲せば無きにも似たり。洪水天に滔るも、禹の功これを治め、大旱地を焦せども、湯の徳これを救へば、數有るが如くにして、而も數無きが如し。秦の始皇帝、天下を一にして尊號を稱す、威儀まことに當る可からず。然れども水神ありて華陰の夜に現はれ、璧を使者に託して、今年祖龍死せんと曰へば、果して始皇やがて沙丘に崩せり。唐の玄宗、開元は三十年の太平を享け、天寶は十四年の華奢をほしいままにせり。然れども開元の盛時に當りて、一行阿闍梨、陛下萬里に行幸して、聖祚疆無からんと奏したりしかば、心得がたきことを白すよとおぼされしが、安祿山の亂起りて、天寶十五年蜀に入りたまふに及び、萬里橋にさしかよりて瞿然として悟り玉へりとなり。此等を思へば、數無きに似たれども、而も數有るに似たり。定命録、續定命録、前定録、感定録等、小説野乘の記するところを見れば、吉凶禍福は、皆定數ありて飲啄笑哭も、悉く天意に因るかと思はる。されど紛紛たる雜書、何ぞ信ずるに足らん。假令數ありとするも、測り難きは數なり。測り難きの數を畏れて、巫覡卜相の徒の前に首を俯せんよりは、知る可きの道に従ひて、古聖前賢の教の下に心を安くせんには如かじ。かつや人の常情、敗れたる者は天の命を稱して歎じ、成れる者は己の力を

説きて誇る。二者共に陋とすべし。事敗れて之を吾が徳の足らざるに歸し、功成つて之を數の定まる有るに委ねなば、其人偽らずして眞、其器小ならずして偉なりといふべし。先哲曰く、知る者は言はず、言ふ者は知らずと。數を言ふ者は數を知らずして、數を言はざる者或は能く數を知らん。

運

古より今に至るまで、成敗の跡、禍福の運、人をして思を潜めしめ數を發せしむるに足るもの固より多し。されども人の奇を好むや、猶以て足れりとせず。是に於て才子は才を馳せ、妄人は妄を恣にして、空中に樓閣を築き、夢裏に悲喜を畫き、意設筆綴して、烏有の談を爲る。或は微しく本づくところあり、或は全く據るところ無し。小説といひ、稗史といひ、戯曲といひ、寓言といふもの即ち是なり。作者の心おもへらく、奇を極め妙を極むと。豈圖らんや造物の脚色は、綺語の奇より奇にして、狂言の妙より妙に、才子の才も敵する能はざるの巧緻あり、妄人の妄も及ぶ可からざるの警拔あらんとは。我が言をば信ぜざる者は、試に看よ建文永樂の事を。

命

我が古小説家の雄を曲亭主人馬琴と爲す。馬琴の作るところ、長篇四五種。八犬傳の雄大、弓張月の壯快、皆江湖の嘖々として稱するところなるが、八犬傳弓張月に比して優るあるも劣らざ

るものを俠客傳と爲す。憾むらくは其の敘するところ、蓋し未だ十の三四を卒るに及ばずして、筆硯空しく曲亭の淨几に遺りて、主人既に逝きて白玉樓の史となり、鹿鳴草舎の翁これを續げるも、亦功を遂げずして死せるを以て、世其の結構の偉、輪奐の美を觀るに至らずして已みたり。然れども其の意を立て材を排する所以を考ふるに、楠氏の孤女を假りて、南朝の爲に氣を吐かんとする、おのづからはれ一大文章たらずんば已まざるものあるをば推知するに足るあり。惜い哉其の成らざるや。

運

俠客傳は女仙外史より換骨脱胎し來る。其の一部は好述傳に藉るありと雖も、全體の女仙外史を化し來れるは掩ふ可からず。此の姑摩媛は即ち是れ彼の月君なり。月君が建文帝の爲に兵を擧ぐるの事は、姑摩媛が南朝の爲に力を致さんとするの藍本たらずんばあらず。此は是れ馬琴が腔子裏の事なりと雖も、假に馬琴をして在らしむるも、吾が言を聽かば、含笑して點頭せん。

命

女仙外史一百回は、清の逸田與、呂熊、字は文兆の著すところ、康熙四十年に意を起して、四十三年秋に至りて業を卒る。其の書の體たるや、水滸傳平妖傳等に同じと雖も、立言の旨は、綱常を扶植し、忠烈を顯揚するに在りといふを以て、南安の郡守陳香泉の序、江西の廉使劉在園の

7

評、河西の學使楊念亭の論、廣州の太守葉南田の跋を得て世に行はる。幻詭猥雜の談に、于戈弓馬の事を挿み、慷慨節義の譚に、神仙縹緲の趣を交ゆ。西遊記に似て、而も其の誇誕は少しく遜り、水滸傳に近くして、而も其の豪快は及ばず、三國志のごとくして、而も其の殺伐はやゝ少し。たゞ其の三者の佳致を併有して、一編の奇話を構成するところは、女仙外史の西遊水滸三國諸書に勝る所以にして、其の大體の風度は平妖傳に似たりといふべし。憾むらくは、通篇儒生の口吻多くして、説話は硬固勃窣、談笑に流暢尖新のところ少きのみ。

女仙外史の名は其の實を語る。主人公月君、これを輔くるの鮑師、曼尼、公孫大娘、弄隱娘等皆女仙なり。鮑弄等の女仙は、もと古傳雜説より取り來つて彩色となすに過ぎず。而して月君は即ち山東蒲臺の妖婦唐賽兒なり。賽兒の亂をなせるは明の永樂十八年二月にして、燕王の篡奪、建文の遜位と相關するあるにあらず。建文猶死せずと雖、篡奪の事成つて既に十八春秋を経たり。賽兒何ぞ實に建文の爲に兵を擧げんや。たゞ一婦人の身を以て兵を起し城を屠り、安遠侯柳升をして征戰に勞し、都指揮衛青をして擊攘に力めしめ、都指揮劉忠をして戰歿せしめ、山東の地をして一時騷擾せしむるに至りたるもの、眞に是れ稗史の好題目たり。之に加ふるに賽兒が洞見預察の明を有し、幻怪詭秘の術を能くし、天書寶劍を得て、惠民布教の事を爲せるも、亦眞に是れ

稗史の絶好資料たらずんばあらず。賽兒の實蹟既に是の如し。此を假り來りて以て建文の位を遜れるに涙を墮し、燕棣の國を奪へるに齒を切り、慷慨悲憤して以て回天の業を爲さんとするの女英雄と爲す。女仙外史の人の愛讀耽翫を惹く所以のもの、決して尠少にあらずして、而して又實に一篇の淋漓たる筆墨、巍峨たる結構を得る所以のもの、決して偶然にあらざるを見る。

賽兒は蒲臺府の民林三の妻、少きより佛を好み經を誦せるのみ、別に異ありしにあらず。林三死して之を郊外に葬る。賽兒墓に祭りて、回るさの路、一山の麓を経たりしに、たま〜豪雨の後にして土崩れ石露はれたり。これを視るに石匣なりければ、就いて窺ひて遂に異書と寶劍とを得たり。賽兒これより妖術に通じ、紙を剪つて人馬となし、劍を揮つて呪祝を爲し、髪を削つて尼となり、教を里閭に布く。禱には效あり、言には驗ありければ、民翕然として之に従ひけるに、賽兒また飢者には食を與へ、凍者には衣を給し、賑濟すること多かりしより、終に追隨する者數萬に及び、尊びて佛母と稱し、其勢甚だ洪大となれり。官之を惡みて賽兒を捕へんとするに及び、賽兒を奉ずる者董彦杲、劉俊、賓鴻等、敢然として起つて戦ひ、益都、安州、莒州、卽墨、壽光等、山東諸州鼎沸し、官と賊と交々勝敗あり。官兵漸く多く、賊勢日に蹙まるに至つて、賽兒を捕へ得、將に刑に處せんとす。賽兒怡然として懼れず。衣を剝いで之を縛し、刀を擧げて

之を砍るに、刀刃入る能はざりければ、已むを得ずして復獄に下し、械枷を體に被らせ、鐵鈕もて足を繋ぎ置きけるに、俄にして皆おのづから解脱し、竟に遷れ去つて終るところを知らず。三司郡縣將校等、皆寇を失ふを以て誅せられぬ。賽兒は如何しけん其後踪跡杳として知るべからず。永樂帝怒つて、およそ北京山東の尼姑は、盡く逮捕して京に上せ、嚴重に勘問し、終に天下の尼姑といふ尼姑を逮ふるに至りしが、得る能はずして止み、遂に後の史家をして、妖耶人耶、吾之を知らず、と云はしむるに至れり。

世の傳ふるところの賽兒の事既に甚だ奇、修飾を假らずして、一部稗史たり。女仙外史の作者の藉りて以て筆墨を鼓するも亦宜なり。然れども賽兒の徒、初より太志ありしにはあらず、官吏の苛虐するところとなつて而して後爆烈迸發して鐵を揚げしのみ。其の永樂帝の賽兒を索むる甚だ急なりしに考ふれば、賽兒の徒窮して戈を執つて立つに及び、或は建文を稱して永樂に抗するありしも亦知るべからず。永樂の時、史に曲筆多し、今いづくにか其實を知るを得ん。永樂篡奪して功を成す、而も聰明剛毅、政を爲す甚だ精、補佐また賢良多し。こゝを以て賽兒の徒、忽にして跡を潜むと雖も、若し秦末漢季の如きの世に出でしめば、陳涉張角、終に天下を動かすの事を爲すに至りたるやも知る可からず。嗚呼賽兒も亦奇女子なるかな。而して此奇女子を藉りて

建文に與し永樂と争はしむ。女仙外史の奇、其の奇を求めずして而しておのづから然るあらんのみ。然りと雖も予猶謂へらく、逸田叟の脚色は假にして後繼に奇なり、造物爺々の施爲は眞にして且更に奇なりと。

明の建文皇帝は實に太祖高皇帝に繼いで位に即きたまへり。時に洪武三十一年閏五月なり。すなはち詔して明年を建文元年としたまひぬ。御代しろしめすことは正しく五歳にわたりたまふ。然るに廟諱を得たまふこと無く、正徳、萬曆、崇禎の閒、事しばし議せられて、而も遂に行はれず、明亡び、清起りて、乾隆元年に至つて、はじめて恭愍惠皇帝といふ諱を得たまへり。其國の徳衰へ澤竭きて、内憂外患、こもく逼り、滅亡に垂とする世には、崩じて諱られざる帝のおはす例もあれど、明の祚は其の後猶二百五十年も續きて、此時太祖の盛徳偉業、炎々の威を揚げ、赫々の光を放ちて、天下萬民を悦服せしめしばかりの後なれば、かゝる不祥の事は起るべくもあらぬ時代なり。さるを其の是の如くなるに至りし所以は、天意か人爲かはいざ知らず、一波動いて萬波動き、不可思議の事の重疊連續して、其の狂瀾は四年の間の天地を震撼し、其餘瀾は萬里の外の邦國に漸浸するに及べるありしが爲ならずばあらず。

建文皇帝諱は允熲、太祖高皇帝の嫡孫なり。御父懿文太子、太祖に紹ぎたまふべかりしが、不幸にして世を早うしたまひぬ。太祖時に御齡六十五にわたらせ給ひければ、流石に淮西の布衣より起つて、腰閒の劔、馬上の鞭、四百餘州を十五年に斬り靡けて、遂に帝業を成せる大豪傑も、薄暮に燭を失つて荒野の旅に疲れたる心地やしけむ、堪へかねて泣き萎れたまふ。翰林學士の劉三吾、御歎はさることながら、既に皇孫のましませば何事か候ふべき、儲君と仰せ出されんには、四海心を繋げ奉らん、然のみは御過憂あるべからず、と白したりければ、實にもと點頭かせられて、其歳の九月、立て、皇太孫と定められたるが、即ち後に建文の帝と申す。谷氏の史に、建文帝、生れて十年にして懿文卒すとあるは、蓋し脱字にして、父君に別れ、儲位に立ちたまへる時は、正しく十六歳におはしける。資性穎慧温和、孝心深くまし／＼て、父君の病みたまへる間、三歳に互りて晝夜膝下を離れたまはず、薨れさせたまふに及びては、思慕の情、悲哀の涙、絶ゆる間も無くて、身も細々と瘠せ細りたまひぬ。太祖これを見たまひて、爾まことに純孝なり、ただ子を亡ひて孫を頼む老いたる我をも念はぬことあらじ、と宣ひて、過哀に身を毀らぬやう愛撫せられたりといふ。其の性質の美、推して知るべし。

はじめ太祖、太子に命じたまひて、章奏を決せしめられけるに、太子仁慈厚くおはしければ、

刑獄に於て宥め輕めらるゝこと多かりき。太子亡せたまひければ、太孫をして事に當らしめたまひけるが太孫もまた寛厚の性、おのづから徳を植ゑたまふこと多く、又太祖に請ひて、遍く禮經を考へ、歴代の刑法を參酌し、刑律は教を弼くる所以なれば、凡そ五倫と相渉る者は、宜しく皆法を屈して以て情を伸ぶべしとの意により、太祖の准許を得て、律の重きもの七十三條を改定しければ、天下大に喜びて徳を頌せざる無し。太祖の言に、吾は亂世を治められたれば、刑重からざるを得ざりき、汝は平世を治むるなれば、刑おのづから當に輕うすべし、とありしも當時の事なり。明の律は太祖の武昌を平らげたる吳の元年に、李善長等の考へ設けたるを初とし、洪武六年より七年に互りて劉惟謙等の議定するに及びて、所謂大明律成り、同じ九年胡惟庸等命を受けて釐正するところあり、又同じ十六年、二十二年の編撰を経て、終に洪武の末に至り、更定大明律三十卷大成し、天下に頒ち示されたるなり。吳の元年より茲に至るまで、獄を決し刑を擬するの應を致すこと精しくして、一代の法始めて定まり、朱氏の世を終るまで、獄を決し刑を擬するの準據となりしかば、後人をして唐に視ぶれば簡嚴、而して寛厚は宋に如かざるも、其の惻隱の意に至つては、各條に散見せりと評せしめ、餘威は遠く我邦に及び、徳川期の識者をして此を研究せしめ、明治初期の新律綱領をして此に探るところあらしむるに至れり。太祖の英明にして意を

民人に致せしことの深遠なるは言ふまでも無し、太子の仁、太孫の慈、亦人君の度ありて、明律因りて以て成るといふべし。既にして太祖崩じて太孫の位に即きたまふや、刑官に諭したまはく、大明律は皇祖の親しく定めさせたまへるところにして、朕に命じて細閱せしめたまへり。前代に較ぶるに往々重きを加ふ。蓋し亂國を刑するの典にして、百世通行の道にあらざる也。朕か前に改定せるところは、皇祖已に命じて施行せしめたまへり。然れども罪の矜疑すべき者は、尙此に止まらず。それ律は大法を設け、禮は人情に順ふ。民を齊ふるに刑を以てするは禮を以てするに若かず。それ天下有司に諭し、務めて禮教を崇び、疑獄を赦し、朕が萬方と與にするを嘉ぶの意に稱はしめよと。嗚呼、既に父に孝にして、又民に慈なり。帝の性の善良なる、誰かこれを然らずとせんや。

是の如きの人にして、帝となりて位を保つを得ず、天に歸して諡を得る能はず、廟無く陵無く、西山の一杯土、封せず樹せずして終るに至る。嗚呼又奇なるかな。しかも其の因縁の糾纏錯雜して、果報の惨苦悲酸なる、而して其の影響の、或は刻毒なる、或は杳渺たる、奇も亦太甚しといふべし。

建文帝の國を遜らざるを得ざるに至れる最初の因は、太祖の諸子を封すること過當にして、地を與ふること廣く、權を附すること多きに基づく。太祖の天下を定むるや、前代の宋元傾覆の所以を考へて、宗室の孤立は、無力不競の弊源たるを思ひ、諸子を衆く四方に封じて、兵馬の權を有せしめ、以て帝室に藩屏たらしめ、京師を拱衛せしめんと欲せり。是れ亦故無きにあらず。兵馬の權、他人の手に落ち、金穀の利、一家の有たらずして、將帥外に傲り、奸邪間に私すれば、一朝事有るに際しては、都城守る能はず、宗廟祀られざるに至るべし。若し夫れ衆く諸侯を建て、分ちて子弟を王とすれば、皇族天下に満ちて榮え、人臣勢を得るの隙無し。こゝに於て、第二子を秦王に封じ、藩に西安に就かしめ、第三子櫛を晉王に封じ、大原府に居らしめ、第四子棟を封じて燕王となし、北平府即ち今の北京に居らしめ、第五子樞を封じて周王となし、開封府に居らしめ、第六子楨を楚王とし、武昌に居らしめ、第七子榑を齊王とし、青州府に居らしめ、第八子梓を封じて潭王とし、長沙に居き、第九子杞を趙王とせしが、此は三歳にして薨し、藩に就くに及ばず、第十子檀を生れて二月にして魯王とし、十六歳にして藩に兗州府に就かしめ、第十一子榛を封じて蜀王とし、成都に居き、第十二子柏を湘王とし、荊州府に居き、第十三子桂を代王とし、大同府に居き、第十四子樞を肅王とし、藩に甘州府に就かしめ、第十五子植を封じて遼

王とし、廣寧府に居き、第十六子楸を慶王として寧夏に居き、第十七子權を寧王に封じ、大寧に居らしめ、第十八子楸を封じて岷王となし、第十九子楸を封じて谷王となす、谷王といふは其の居るところ宣府の上谷の地たるを以てなり、第二十子松を封じて韓王となし、開原に居らしむ、第二十一子楸を藩王とし、第二十二子楸を安王とし、第二十三子楸を唐王とし、第二十四子楸を鄂王とし、第二十五子楸を伊王としたり。藩王以下は、永樂に及んで藩に就きたるなれば、姑らく措きて論ぜざるも、太祖の諸子を封じて王となせるも亦多しといふべく、而して枝柯甚だ盛んにして本幹卻つて弱きの勢を致せるに近しといふべし。明の制、親王は金册金寶を授けられ、歳祿は萬石、府には官屬を置き、護衛の甲士、少き者は三千人、多き者は一萬九千人に至り、冕服車旗邸第は、天子に下ること一等、公侯大臣も伏して而して拜謁す。皇族を尊くし臣下を抑ふるも亦至れりといふべし。且つ元の裔の猶存して、時に塞下に出没するを以て、邊に接せる諸王をして、國中に專制し、三護衛の重兵を擁するを得せしめ、將を遣りて諸路の兵を徵すにも、必ず親王に關白して乃ち發することとせり。諸王をして權を得せしむるも、亦大なりといふべし。太祖の意に謂へらく、是の如くなれば、本支相輔けて、朱氏永く昌え、威權下に移る無く、傾覆の患も生ずるに地無からんと。太祖の深智達識は、まことに能く前代の覆轍に鑑みて、後世に長計

を貽さんとせり。されども人智は限有り、天意は測り難し。豈圖らんや、太祖が熟慮遠謀して施爲せるところの者は、即ち是れ孝陵の土未だ乾かずして、北平の塵既に起り、矢石京城に雨注して、皇帝遐陬に雲遊するの因とならんとは。

太祖が諸子を封ずることの過ぎたるは、夙に之を論じて、然る可からずとなせる者あり。洪武九年といへば建文帝未だ生れざるほどの時なりき。其歲閏九月、たましく天文の變ありて、詔を下し直言を求められにければ、山西の葉居升といふもの、上書して第一に、分封の太だ侈れること、第二には刑を用ゐる太だ繁きこと、第三には治を求むる太だ速やかなることの三條を言へり。其の分封太侈を論ずるに曰く、都城百雉を過ぐるは國の害なりとは、傳の文にも見えたるを、國家今や秦晉燕齊梁楚吳閩の諸國、各其地を盡して之を封じたまひ、諸王の都城宮室の制、廣狹大小、天子の都に亞ぎ、之に賜ふに甲兵衛士の盛なるを以てしたまへり。臣ひそかに恐る數世の後尾大掉はず、然して後に之が地を削りて之が權を奪はゞ、則ち其の怨を起すこと、漢の七國、晉の諸王の如くならん。然らざれば則ち險を恃みて衡を争ひ、然らざれば則ち衆を擁して入朝し、甚しければ則ち間に縁りて而して起たんに、之を防ぐも及ぶ無からん。孝景皇帝は漢の高帝の孫也、七國の王は皆景帝の同宗父兄弟子孫なり。然るに當時一たび其地を削れば則ち兵を構へて

七國の事、七國の事、嗚呼何ぞ明室と因縁の深きや。洪武二十五年九月、懿文太子の後を承けて其御子允熾皇太孫の位に即かせたまふ。繼紹の運まさに是の如くなるべきが上に、下は四海の心を繋ぐるところなり、上は一人の命を宜したまふところなり、天下皆喜びて、皇室萬福と慶賀したり。太孫既に立ちて皇太孫となり、明らかに皇儲となりたまへる上は、齡猶弱くとも、やがて天下の君たるべく、諸王或は功あり或は徳ありと雖も、遠からず俯首して命を奉すべきなれば、理に於ては當に之を敬すべきなり。されども諸王は積年の威を挟み、大封の勢に藉り、且は叔父の尊きを以て、不遜の事の多かりければ、皇太孫は如何ばかり心苦しく厭はしく思ひしむたりけむ。一日東角門に坐して、侍讀の太常卿黃子澄といふものに、諸王驕慢の狀を告げ、諸叔父各大封重兵を擁し、叔父の尊きを負みて傲然として予に臨む、行末の事も如何あるべきや、これに處し、これを制するの道を問はんと曰ひたまふ。子澄名は湜、分宜の人、洪武十八年の試に第一を以て及第したりしより累進してこゝに至れるにて、經史に通曉せるはこれ有りと雖も、世故に練達することは未だ足らず、侍讀の身として日夕奉侍すれば、一意たゞ太孫に忠ならんと欲して、かゝる例は其昔にも見えたり、但し諸王の兵多しとは申せ、もと護衛の兵にして緩にみづから守るに足るのみなり、何程の事かあらん、漢の七國を削るや、七國叛きたれども、閉も無く平定し

たり、六師一たび臨まば、誰か能く之を支へん、もとより大小の勢、順逆の理、おのづから然るもの有るなり、御心安く思召せと、七國の古を引ききて對ふれば、太孫は子澄が答を、げに道理なりと信じたまひぬ。太孫猶齡若く、子澄未だ世に老いず、片時の談、七國の論、何ぞ圖らん他日山崩れ海湧くの大事を生せんとは。

太祖の病は洪武三十一年五月に起りて、同閏五月西宮に崩す。其遺詔こそは感ずべく考ふべきこと多けれ。山戰野戰又は水戰、幾度と無く畏るべき危険の境を冒して、無産無官又無家、何等の恃むべきをも有たぬ孤獨の身を振ひ、終に天下を一統し、四海に君臨し、心を盡して世を治め、慮を竭して民を濟ひ、而して禮を尙び學を重んじ、百忙の中、手に書を輟めず、孔子の教を篤信し、子は誠に萬世の師なりと稱して、衷心より之を尊び仰ぎ、施政の大綱、必ず此に依據し、又蚤歳にして佛理に通じ、内典を知るも、梁の武帝の如く淫溺せず、又老子を愛し、恬靜を喜び、自から道徳經註二卷を撰し、解縉をして、上疏の中に、學の純ならざるを譏らしむるに至りたるも、漢の武帝の如く神仙を好尙せず、嘗て宋濂に謂つて、人君能く心を清くし欲を寡くし、民をして田里に安んじ、衣食に足り、熙々皞々として自ら知らざらしめば、是れ即ち神仙なりと曰ひ、詩文を著くして、文集五十卷、詩集五卷を著せるも、詹同と文章を論じては、文はたゞ誠意溢出

するを尙ふと爲し、又洪武六年九月には、詔して公文に對偶文辭を用ゐるを禁じ、無益の彫刻藻繪を事とするを遏めたるが如き、まことに通ずること博くして拘へらるゝこと少く、文武を兼ねて有し、智勇を併せて備へ、體驗心證皆富みて深き一大偉人たる此の明の太祖、開天行道肇紀立極大聖至神仁文義武俊德成功高皇帝の諡號に負かざる朱元璋、字は國瑞の世を辭して、其身は地に入り、其神は空に歸せんとするに臨みて、言ふところ如何。一鳥の微なるだに、死せんとするや其聲人を動かすと云はずや。太祖の遺詔感ず可く考ふ可きもの無からんや。遺詔に曰く、朕皇天の命を受けて、大任に世に膺ること、三十有一年なり、憂危心に積み、日に勤めて怠らず、専ら民に益あらんことを志しき。奈何せん寒微より起りて、古人の博智無く、善を好し惡を惡むこと及ばざること多し。今年七十有一、筋力衰微し、朝夕危懼す、慮るに終らざること恐るのみ。今萬物自然の理を得、其れ奚んぞ哀念かこれ有らん。皇太孫允炆、仁明孝友にして、天下心を歸す、宜しく大位に登るべし。中外文武臣僚、心を同じうして輔弼し、以て吾が民を福せよ。葬祭の儀は、一に漢の文帝の如くにして異にする勿れ。天下に布告して、朕が意を知らしめよ。孝陵の山川は、其の故に因りて改むる勿れ。天下の臣民は、哭臨する三日にして、皆服を釋き、嫁娶を妨ぐるなかれ。諸王は國中に臨きて、京師に至る毋れ。諸の令の中に在らざる者は、此命

を推して事に從へと。

嗚呼、何ぞ其言の人を感じしむること多きや。大任に膺ること、三十一年、憂危心に積み、日に勤めて怠らず、専ら民に益あらんことを志しき。と云へるは、眞に是れ帝王の言にして、堂々正大の氣象、飄々仁恕の襟懷、百歳の下、人をして欽仰せしむるに足るものあり。奈何せん寒微より起りて、智淺く德寡し、といへるは、謙遜の態度を取り、反求の工夫に切に、諱まず飾らざる、誠に美とすべし。今年七十有一、死且夕に在り、といへるは、英雄も亦大限の漸く逼るを如何ともする無き者。而して、今萬物自然の理を得。其れ奚んぞ哀念かこれ有らん。と云へる、流石に孔孟佛老の教に於て得るところあるの言なり。死後に英雄多く、死前に豪傑少きは、世間の常態なるが、太祖は是れ眞豪傑、生きて長春不老の癡想を懷かず、死して萬物自然の數理に安んぜんとす。從容として過らず、晏如として傷れず、偉なる哉、偉なる哉。皇太孫允炆、宜しく大位に登るべし。と云へるは、一言や鐵の鑄られたるが如し、衆論の絲の紛るるを防ぐ。これより前、太孫の儲位に即くや、太祖太孫を愛せざるにあらずと雖も、太孫の人となり仁孝聰穎にして、學を好み書を讀むことはこれ有り、然も勇壯果決の意氣は甚だ缺く。此を以て太祖の詩を賦せしむることに、其詩婉美柔弱、豪壯瑰偉の處無く、太祖多く喜ばず。一日太孫をして詞句の屬

對をなさしめしに、大に旨に稱はず、復び以て燕王様に命ぜられけるに、燕王の語は乃ち佳なりけり。燕王は太祖の第四子、容貌偉にして鬚美はしく、智勇あり、大略あり、誠を推して人に任じ、太祖に肖たること多かりしかば、太祖も此を悦び、人も或は意を寄するものありたり。此に於て太祖密に儲位を易へんとするに意ありしが、劉三吾之を阻みたり。三吾は名は如孫、元の遺臣なりしが、博學にして、文を善くしたりければ、洪武十八年召されて出でて仕へぬ。時に年七十三。當時汪叟、朱善と與に、世稱して三老と爲す。人となり慷慨にして城府を設けず、自ら號して坦坦翁といへるにも、其の風格は推知すべし。坦坦翁、生平實に坦坦、文章學術を以て太祖に仕へ、禮儀の制、選舉の法を定むるの議に與りて定むる所多く、帝の洪範の注成るや、命を受けて序を爲り、敕修の書、省躬錄、書傳會要、禮制集要等の編撰總裁となり、居然たる一宿儒を以て、朝野の重んずるところたり。而して大節に臨むに至りては、屹として奪ふ可からず。懿文太子の薨するや、身を挺んで、皇孫は世嫡なり、大統を承けたまはんこと、禮也、と云ひて、内外の疑懼を定め、太孫を立てて儲君となせし者は、實に此の劉三吾たりしなり。三吾太祖の意を知るや、何ぞ言無からむ。乃ち曰く、若し燕王を立て給はば秦王晉王を何の地に置き給はむと。秦王秋、晉王樞は、皆燕王の兄たり。孫を廢して子を立つるだに、定まりたるを覆すなり、

選

命

まして兄を越して弟を君とするは序を亂るなり、世豈事無くして已まんや、との意は言外に明らかなりければ、太祖も英明絶倫の主なり、言下に非を悟りて、其事止みけるなり。是の如き事もありしなれば、太祖みづから崩後の動搖を防ぎ、暗中の飛躍を遏めて、特に厳しく皇太孫允熉宜しく大位に登るべしとは、詔を遺されたるなるべし。太祖の治を思ふの慮も遠く、皇孫を愛するの情も篤しといふ可し。葬祭の儀は、漢の文帝の如くせよ、と云へる、天下の臣民は哭臨三日にして、服を釋き、嫁娶を妨ぐる勿れ、と云へる、何ぞ儉素にして仁恕なる。文帝の如くせよとは、金玉を用ゐる勿れとなり。孝陵の山川は其の故に因れとは、土木を起す勿れとなり。嫁娶を妨ぐる勿れとは、民をして福あらしめんとなり。諸王は國中に臨きて、京に至るを得る勿かれ、と云へるは、蓋し其意諸王其の封を去りて京に至らば、前代の遺孽、邊土の黠豪等、或は虚に乗じて事を擧ぐるあらば、星火も延焼して、燎原の勢を成すに至らんことを慮るゝに似たり。此も亦愛民憂世の念、おのづから此に至るといふべし。太祖の遺詔、嗚呼、何ぞ人を感じしむるの多きや。

選

命

然りと雖も、太祖の遺詔、考ふ可きも亦多し。皇太孫允熉、天下心を歸す、宜しく大位に登るべし、と云へるは、何ぞや。既に立つて皇太孫となる。遺詔無しと雖も、當に大位に登るべきの

み。特に大位に登るべしといふは、朝野の聞、或は皇太孫の大位に登らざらんことを欲する者あり、太孫の年少く勇乏しき、自ら謙讓して諸王の中の材雄に略大なる者に位を遷らんことを欲する者ありしが如きをも猜せしむ。仁明孝友、天下心を歸す、と云へるは、何ぞや。明の世を治むる、纔に三十一年、元の裔猶未だ滅びず、中國に在るもの無しと雖も、漠北に、塞西に、邊南に、元の同種の廣大の地域を有して蟻踞するもの存し、太祖崩じて後二十餘年にして猶大に興和に寇するあり。國外の情是の如し。而して域内の事、また英主の世を御せんことを幸とせずんばならず。仁明孝友は固より尙ふべしと雖も、時勢の要するところ、實は雄材大略なり。仁明孝友、天下心を歸するといふと雖も、或は恐る、天下を十にして其の心を歸する者七八に過ぎざらんことを。中外文武臣僚、心を同じうして輔祐し、以て吾が民を福せよ、といへるは、文武臣僚の中、心を同じうせざる者あるを懼るゝに似たり。太祖の心、それ安んぜざる有る耶、非耶。諸王は國中に臨きて京に至るを得る無かれ、と云へるは、何ぞや。諸王の其封國を空しうして奸驚の乘ずるところとならんことを慮るといふも、諸王の臣、豈一時を託するに足る者無からんや。子の父の葬に趨るは、おのづから是れ情なり、是れ理なり、禮にあらざ道にあらざと爲さんや。諸王をして葬に會せざらしむる詔は、果して是れ太祖の言に出づるか、太祖にして此詔を遺すとせば、

太祖ひそかに其の斥けて聽かざりし葉居升の言の、諸王眾を擁して入朝し、甚しければ則ち聞に縁りて起たんに、之を防ぐも及ぶ無き也。と云へるを思へるにあらざる無きを得んや。嗚呼子にして父の葬に會するを得ず、父の意なりと謂ふと雖も、子よりして論ずれば、父の子を待つも亦疎にして薄きの憾無くんばあらざらんとす。詔或は時勢に中らん。而も實に人情に遠いかな。凡そ施爲命令謀圖言議を論せず、其の人情に遠きこと甚しきものは、意は善なるも、理は正しきも、計は中るも、見は徹するも、必らず弊を生じ凶を招くものなり。太祖の詔、可なることは、即ち可なり、人情には遠し。これより先に洪武十五年高皇后の崩するや、秦王晉王燕王等皆國に在り、然れども諸王喪に奔りて京に至り、禮を卒へて還れり。太祖の崩せると、其後の崩せると、天下の情勢に關すること異なりと雖も、母の喪には奔りて従ふを得て、父の葬には入りて會するを得ざらしむ。此も亦人を強ひて人情に遠きを爲さしむるものなり。太祖の詔、まことに人情に遠し。豈弊を生じ凶を致す無からんや。果して事端は先づこゝに發したり。崩を聞いて諸王は京に入らんとし、燕王は將に淮安に至らんとせるに當りて、齊秦は帝に言し、人をして勅を齎らして國に還らしめぬ。燕王を首として諸王は皆悦ばず、これ尙書齊秦の疎聞するなりと謂ひぬ。建文帝は位に即きて劈頭第一に諸王をして悦ばざらしめぬ。諸王は帝の叔父なり。尊族なり、封土

を有し、兵馬民財を有せる也。諸王にして悦ばざるときは、宗家の枝柯、皇室の藩屏たるも何かあらん。嗚呼、これ罪齊泰にあるか、建文帝にあるか、抑又遺詔にあるか、諸王にあるか、之を知らざる也。又讒つて思ふに、太祖の遺詔に、果して諸王の入臨を止むるの語ありしや否や。或は疑ふ、太祖の人情に通じ、世故に熟せる、まさに是の如きの詔を遺さざるべし。若し太祖にして果して登遐の日に際して諸王の葬に會するを欲せざらば、平生無事從容の日、又は諸王の京を退きて封に就くの時、親しく諸王に意を諭すべきなり。然らば諸王も亦發駕奔喪の際に於て、半途にして擁退せらるゝの不快事に會ふ無く、各其封に於て哭臨して、他を責むるが如きこと無かるべきのみ。太祖の智にして事此に出でず、詔を遺して諸王の情を屈するは解すべからず。人の情屈すれば則ち悦ばず、悦ばざれば則ち怨を懷き他を責むるに至る。怨を懷き他を責むるに至れば、事無きを欲するも得べからず。太祖の人情に通せる何ぞ之を知るの明無からん。故に曰く、太祖の遺詔に、諸王の入臨を止むる者は、太祖の爲すところにあらず、疑ふらくは齊泰黃子澄の輩の假託するところならんと。齊泰の輩、もとより諸王の帝に利あらざらんことを恐る、詔を矯むるの事も、世其例に乏しからず、是の如きの事、未だ必ずしも無きを保せず、然れども是れ推測の言のみ、眞耶、僞耶、太祖の失か、失にあらざるか、齊泰の爲か、爲にあら

ざる耶、將又齊泰、遺詔に託して諸王の入京會葬を退めざる能はざるの勢の存せしか、非耶。建文永樂の間、史に曲筆多し、今新に史徵を得るあるにあらざれば、疑を存せんのみ、確に知る能はざる也。

太祖の崩せるは閏五月なり、諸王の入京を退められて悦ばずして歸れるの後、六月に至つて戸部侍郎卓敬といふもの、密疏を上る。卓敬字は惟恭、書を讀んで十行俱に下ると云はれし穎悟聰敏の士、天文地理より律曆兵刑に至るまで究めざること無く、後に成祖をして、國家士を養ふこと三十年、唯一卓敬を得たり、と歎せしめしほどの英才なり。鯁直慷慨にして、避くるところ無し。嘗て制度未だ備はらずして諸王の服乘も太子に擬せるを見、太祖に直言して、嫡庶相亂り、尊卑序無くんば、何を以て天下に令せんや、と説き、太祖をして、爾の言是なり、と曰はしめたり。其の人となり知る可きなり。敬の密疏は、宗藩を裁抑して、禍根を除かんとなり。されども、帝は敬の疏を受けたまひしのみにて、報じたまはず、事竟に寢みぬ。敬の言、蓋し故無くして發せず、必らず竊に聞くところありしなり。二十餘年前の葉居升が言は、是に於て其中れるを示さんとし、七國の難は今將に發せんとす。燕王、周王、齊王、湘王、代王、岷王等、祕信相通じ、

密使互に動き、穩やかならぬ流言ありて、朝に聞えたり。諸王と帝との間、帝は其の未だ位に即かざりしより諸王を忌憚し、諸王は其の未だ位に即かざるに當つて儲君を侮り、叔父の尊を挾んで不遜の事多かりしなり。入京會葬を止むるの事、遺詔に出づと云ふと雖も、諸王、實を讒臣に託して、而して其の奸惡を除かんと云ひ、香を孝陵に進めて、而して吾が誠實を致さんと云ふに至つては、蓋し辭柄無きにあらず。諸王は合同の勢あり、帝は孤立の狀あり。嗚呼、諸王も疑ひ、帝も疑ふ。相疑ふや何ぞ睽離せざらん。帝も戒め、諸王も戒む。相戒むるや何ぞ疎隔せざらん。疎隔し、睽離す、而して帝の爲に密に圖るものあり、諸王の爲に私に謀るものあり、況んや藩王を以て天子たらんとするものあり、王を以て皇となさんとするものあるに於てをや。事遂に決裂せずんば止まざるものある也。

帝の爲に密に圖る者をば誰となす。曰く、黃子澄となし、齊泰となす。子澄は既に記しぬ。齊泰は深水の人、洪武十七年より漸く世に出づ。建文帝位に即きたまふに及び、子澄と與に帝の信頼するところとなりて、國政に參す。諸王の入京會葬を遏めたる時の如き、諸王は皆謂へらく、秦皇考の詔を矯めて骨肉を聞つと。秦の諸王の憎むところとなれる、知る可し。諸王の爲に私に謀る者を誰となす。曰く、諸王の雄を燕王となす。燕王の傳に、僧道衍あり。

道衍は僧たりと雖も、灰心滅智の羅漢にあらずして、卻つて是れ好謀善算の人なり。洪武二十八年、初めて諸王の封國に就く時、道衍躬づから薦めて燕王の傳とならんとし、謂つて曰く、大王臣をして侍するを得せしめたまはば、一白帽を奉りて大王がために戴かしめんと。王上に白を冠すれば、其文は皇なり。儲位明らかに定まりて、太祖未だ崩せざるの時だに、是の如きの怪僧ありて、燕王が爲に白帽を奉らんとし、而して燕王是の如きの怪僧を延いて帷帳の中に居く。燕王の心胸もとより清からず、道衍の爪甲も毒ありといふべし。道衍燕邸に至るに及んで袁珙を王に薦む。袁珙は字は廷玉、鄞の人にして、此亦一種の異人なり。嘗て海外に遊んで、人を相するの術を別古崖といふものに受く。仰いで皎日を見て、目盡く眩して後、赤豆黑豆を暗室中に布いて之を辨し、又五色の縷を窗外に懸け、月に映じて其色を別つて誑つこと無く、然して後に人を相す。其法は夜中を以て兩炬を燃し、人の形狀氣色を視て、參するに生年月日を以てするに、百に一謬無く、元末より既に名を天下に馳せたり。其の道衍と識るに及びたるは、道衍が嵩山寺に在りし時にあり。袁珙道衍が相をつくふと觀て、是れ何ぞ異僧なるや、目は三角なり、形は病虎の如し。性必らず殺を嗜まん。劉秉忠の流なりと。劉秉忠は學内外を兼ね、識三才を綜ぶ、釋氏より起つて元主を助け、九州を混一し、四海を併合す。元の天下を得る、もとより其の兵力に頼

ると雖も、成功の速疾なるもの、劉の揮霍の宜しきを得るに因るもの亦鮮からず、秉忠は實に奇偉卓犖の僧なり。道衍秉忠の流なりとなさる、まさに是れ擾處に爬着するもの。是れより二人、友とし善し。道衍の珙を燕王に薦むるに當りてや、燕王先づ使者をして珙と與に酒肆に飲ましめ王みづから衛士の儀表堂々たるもの九人に雜はり、おのれ亦衛士の服を服し、弓矢を執りて肆中に飲む。珙一見して即ち趨つて燕王の前に拜して曰く、殿下何ぞ身を輕んじて此に至りたまへると。燕王等笑つて曰く、吾輩皆護衛の士なりと。珙頭を掉つて是とせず。こゝに於て王起つて入り、珙を宮中に延きて詳に相せしむ。珙諦視すること良久しうして曰く、殿下は龍行虎歩したまひ、日角天に挿む、まことに異日太平の天子におはします。御年四十にして、御驥躡を過ぎさせたまふに及ばせたまはば、大寶位に登らせたまはんこと疑あるべからず。と白す。又燕府の將校官屬を相せしめたまふに珙一々指點して曰く、某は公たるべし、某は侯たるべし、某は將軍たるべし、某は貴官たるべしと。燕王語の洩れんことを慮り、陽に斥けて通州に至らしめ、舟路密に召して邸に入る。道衍は北平の慶壽寺に在り、珙は燕府に在り、燕王と三人、時々人を屏けて語る。知らず其の語るところのもの何ぞや。珙は柳莊居士と號す。時に年蓋し七十に近し。抑亦何の欲するところあつて燕王に勸めて叛せしめしや。其子忠徹の傳ふところの柳莊相法、今に至

運

命

運

命

つて猶存し、風鑑の津梁たり。珙と永樂帝と答問するところの永樂百問の中、帝贊の事を記す。相法三卷、信ぜざるものは、目して陋書となすと雖も、盡く斥く可からざるものあるに似たり。忠徹も家學を傳へて、當時に信せらる。其の著はすところ、古今識鑑八卷ありて、明志採録す。予未だ寓目せずと雖も、蓋し藻鑑の道を説く也。珙と忠徹と、偕に明史方伎傳に見ゆ。珙の燕王に見ゆるや、鬚長じて臍を過ぎなば寶位に登らんといふ。燕王笑つて曰く、吾が年將に四旬ならんとす、鬚豈能く復長せんやと。道衍こゝに於て金忠といふものを薦む。金忠も亦鄙の人なり、少くして書を讀み易に通ず。卒伍に編せらるゝに及び、卜を北平に賣る。卜多く奇中して、市人傳へて以て神と爲す。燕王忠をして卜せしむ。忠卜して卦を得て、貴きこと言ふ可からずといふ。燕王の意漸くにして固し。忠後に仕へて兵部尙書を以て太子監國に補せらるゝに至る。明史卷百五十に傳あり。蓋し亦一異人なり。

帝の側には黃子澄齊泰あり、諸藩を削奪するの意、いかでこれ無くして已まん。燕王の傍には僧道衍袁珙あり、秘謀を醜釀するの事、いかでこれ無くして已まん。二者の間、既に是の如し、風塵鶴唳、人相驚かんと欲し、劍光火影、世漸く將に亂れんとす。諸王不穩の流言、朝に聞ゆる

こと類なれば、一日帝は子澄を召したまひて、先生、曠昔の東角門の言を憶えたまふや、と仰す。子澄直ちに對へて、敢て忘れまをさすと白す。東角門の言は、即ち子澄七國の故事を論せるの語なり。子澄退いて齊泰と議す。泰曰く、燕は重兵を握り、且素より大志あり、當に先づ之を削るべしと。子澄が曰く、然らず、燕は強め備ふること久しければ、卒に圖り難し。宜しく先づ周を取り、燕の手足を剪り、而して後燕圖るべしと。乃ち曹國公李景隆に命じ、兵を調して梓に河南に至り、周王樞及び其の世子妃嬪を執へ、爵を削りて庶人となし、之を雲南に遷しぬ。樞は燕王の同母弟なるを以て、帝もかねて之を疑ひ憚り、樞も亦異謀あり、樞の長史王翰といふもの、數謀めたれど納れず、樞の次子汝南王有勳の變を告ぐるに及び、此事あり。實に洪武三十一年八月にして、太祖崩じて後、幾干月を距らざる也。冬十一月、代王桂、暴虐民を苦むるを以て、蜀に入りて蜀王と共に居らしむ。

諸藩漸く削奪せられんとするの明らかなるや、十二月に至りて、前軍都督府斷事高巍書を上りて政を論ず。巍は遼州の人、氣節を尚び文章を能くす、材器偉ならずと雖も、性質實に惟美、母の蕭氏に事へて孝を以て稱せられ洪歩十七年旌表せらる。其の立言正平なるを以て太祖の嘉納するところとなりし又一個人の好人物なり。時に事に當る者、子澄、泰の輩より以下、皆諸王を

削るを議す。獨り巍と御史韓郁とは説を異にす。巍の言に曰く、我が高皇帝、三代の公に法り、嬴秦の陋を洗ひ、諸王を分封して、四裔に藩屏たらしめたまへり。然れども之を古制に比すれば、封境過大にして、諸王又率ね驕逸不法なり。削らざれば即ち朝廷の紀綱立たず。之を削れば親を親むの恩を傷る。賈誼曰く、天下の治安を欲するは、深く諸侯を建てて其力を少くするに若くは無しと。臣愚謂へらく、今宜しく其意を師とすべし。臯錯が削奪の策を施す勿れ、主父偃が推恩の令に效ふべし。西北諸王の子弟は、東南に分封し、東南諸王の子弟は、西北に分封し、其地を小にし、其城を大にし、以て其力を分たば、藩王の權は、削らずして弱からん。臣又願はくは陛下益々親親の禮を隆んにし、歳時伏臘、使問絶えず、賢者は詔を下して褒賞し、不法者は初犯は之を宥し、再犯も之を赦し、三犯改めざれば、即ち太廟に告げて、地を削り、之を廢處せんに、豈服順せざる者あらんやと。帝之を然なりとは聞召したりけれど、勢既に定まりて、削奪の議を取る者のみ充滿ちたりければ、高巍の説も用ゐられで已みぬ。

建文元年二月、諸王に詔りして、文武の吏士を節制し、官制を更定するを得ざらしむ。此も諸藩を抑ふるの一なりけり。夏四月西平侯沐晟、岷王樞の不法の事を奏す。よつて其の護衛を削り、其の指揮宗麟を誅し、王を廢して庶人となす。又湘王柏の偽りて鈔を造り、及び擅に人を殺す

を以て、敕を降して之を責め、兵を遣つて執へしむ。湘王もと膂力ありて氣を負ふ。曰く、吾聞
く、前代の大臣の吏に下さるゝや、多く自ら引決すと、身は高皇帝の子にして、南面して王とな
る。豈能く僕隸の手に辱しめられて生活を求めんやと。遂に宮を闔ちて自ら焚死す。齊王樽もま
た人の告ぐるるところとなり、廢せられて庶人となり、代王桂もまた遂に廢せられて庶人となり、
大同に幽せらる。

燕王は初より朝野の注目せるところなり、且は威望材力も羣を抜けるなり。又其の終に天子た
るべきを期するものも有るなり、又私に異人術士を養ひ、勇士勁卒をも蓄へ居れるなり。人も疑
ひ、己も危ぶみ、朝廷と燕と竟に兩立する能はざらんとするの勢あり。されば三十一年の秋、周
王權の執へらるゝを見て、燕王は遂に壯士を簡みて護衛となし、極めて警戒を嚴にしたり。され
ども齊秦黃子澄にありては、もとより燕王を容す能はず。たま／＼北邊に寇警ありしを機とし、
防邊を名となし、燕藩の護衛の兵を調して塞を出でしめ、其の羽翼を去りて、其の咽喉を扼せん
とし、乃ち工部侍郎張昌をもて北平左布政使となし、謝貴を以て都指揮使となし、燕王の動靜を
察せしめ、嶺國公徐輝祖、曹國公李景隆をして、謀を協せて燕を圖らしむ。
建文元年正月、燕王長史葛誠をして入つて事を奏せしむ。誠、帝の爲に具に燕邸の實を告ぐ。

こゝに於て誠を遣りて燕に還らしめ、内應を爲さしむ。燕王覺つて之に備ふるあり。二月に至り、
燕王入覲す。皇道を行きて入り、陛に登りて拜せざる等、不敬の事ありしかば、監察御史曾鳳韶
これを劾せしが、帝曰く、至親問ふ勿れと。戸部侍郎卓敬、先に書を上つて藩を抑へ禍を防がん
ことを言ふ。復密奏して曰く、燕王は智慮人に過ぐ、而して其の據る所の北平は、形勝の地にし
て、士馬精強に、金元の由つて興るところなり、今宜しく封を南昌に徙したまふべし。然らば則
ち萬一の變あるも控制し易しと。帝敬に對へたまはく、燕王は骨肉至親なり、何ぞ此に及ぶこと
あらんやと。敬曰く、隋文揚廣は父子にあらずやと。敬の言實に然り、揚廣は子を以てだに父を
弑す。燕王の傲慢なる、何をか爲さざらん。敬の言、敦厚を缺き、帝の意、醇正に近しと雖も、
世相の險惡にして人情の陰毒なる、悲む可きかな、敬の言卻つて實に切なり。然れども帝默然た
ること良久しくして曰く、卿休せよと。三月に至つて燕王國に還る。都御史暴昭、燕邸の事を密
偵して奏するあり。北平の按察使僉事の湯宗、按察使陳瑛が燕の金を受けて燕の爲に謀ることを
劾するあり。よつて瑛を逮捕し、都督宗忠をして兵三萬を率ゐ、及び燕王府の護衛の精銳を忠の
麾下に隸し、開平に屯して、名を邊に備ふるに藉り、都督の耿璘に命じて兵を山海關に練り、徐
凱をして兵を臨清に練り、密に張昺謝貴に勅して、嚴に北平の動搖を監視せしむ。燕王此の勢を

視、國に歸れるより疾に託して出でず、之を久しうして遂に疾篤しと稱し、以て一時の視聽を避
 けんとせり。されども水あるところ溼氣無き能はず、火あるところは燥氣無き能はず、六月に至
 りて燕山の護衛百戸倪諒といふもの變を上り、燕の官校于諒周鐸等の陰事を告げければ、二人は
 逮へられて京に至り、罪明らかにして誅せられぬ。こゝに於て事燕王に及ばざる能はず、詔あ
 りて燕王を責む。燕王辯疏する能はざるところありけむ。伴りて狂となり、號呼疾走して、市中
 の民家に酒食を奪ひ、亂語妄言、人を驚かして省みず、或は土壤に臥して、時を經れど覺めず、
 全く常を失へるもの如し。張曷謝貴の二人、入りて疾を問ふに、時まさに盛夏に屬するに、王
 は爐を圍み、身を顛はせて、寒きこと甚しと曰ひ、宮中をさへ杖つきて行く。されば燕王まこと
 に狂したりと謂ふ者もあり、朝廷も稍これを信ぜんとするに至りけるが、葛誠ひそかに曷と貴と
 に告げて、燕王の狂は、一時の急を緩くして、後日の計に便にせんまでの許に過ぎず、本より恙
 無きのみ、と知らせたり。たま／＼燕王の護衛百戸の鄧庸といふもの、闕に詣り事を奏したりけ
 るを、齊泰請ひて執へて鞠問しけるに、王が將に兵を擧げんとするの状をば逐一に白したり。
 待設けたる齊泰は、たゞちに符を發し使を遣はし、往いて燕府の官屬を逮捕せしめ、密に謝貴
 張曷をして、燕府に在りて内應を約せる長史葛誠、指揮盧振と氣脈を通せしめ、北平都指揮張信

といふものの、燕王の信任するところとなるを利し、密敕を下して、急に燕王を執へしむ。信は
 命を受けて憂懼爲すところを知らず。情誼を思へば燕王に負くに忍びず、敕命を重んずれば私恩
 を論ずる能はず、進退兩難にして、行止ともに難く、左思右慮、心終に決する能はねば、苦悶の
 色は面にもあらはれたり。信が母疑ひて、何事のあればにや、汝の深憂太息することよ、と詰り
 問ふ。信是非に及ばず、事の仕末を告ぐれば、母大に驚いて曰く、不可なり、汝が父の興、毎に
 言へり王氣燕に在りと、それ王者は死せず、燕王は汝の能く擒にするところにあらざるなり、燕
 王に負いて家を滅することなかれと。信愈々惑ひて決せざりしに、敕使信を促すこと急なりけれ
 ば、信遂に怒つて曰く、何ぞ太甚しきやと。乃ち意を決して燕邸に造る。造ること三たびすれど
 も、燕王疑ひて而して辭し、入ることを得ず。信婦人の車に乗じ、徑ちに門に至りて見ゆること
 を求め、やうやく召入れらる。されども燕王猶疾を装ひて言はず。信曰く、殿下爾したまふ無か
 れ、まことに事あらば當に臣に告げたまふべし。殿下もし情を以て臣に語りたまはずば、上命あ
 り、當に執はれに就きたまふべし、如し意あらば臣に諱みたまふ勿れと。燕王信の誠あるを見、
 席を下りて信を拜して曰く、我が一家を生かすものは子なりと。信つぶさに朝廷の燕を圍るの状
 を告ぐ。形勢は急轉直下せり。事態は既に決裂せり。燕王は道衍を召して、將に大事を擧げんと

す。

天耶、時耶、燕王の胸中颯風まさに動いて、黒雲飛ばんと欲し、張玉、朱能等の猛將梟雄、眼底紫電閃いて、雷火發せんとす。燕府を擧つて殺氣陰森たるに際し、天も亦應ぜるか、時抑至れるか、颯風暴雨卒然として大に起りぬ。蓬々として始まり、號々として怒り、奔騰狂轉せる風は、沛然として至り、澎然として瀉ぎ、猛打亂撃するの雨と伴なつて、乾坤を震撼し、樹石を動盪しぬ。燕王の宮殿堅牢ならざるにあらざるも風雨の力大にして、高閣の簷瓦吹かれて空に飄り、霏然として地に墮ちて粉碎したり。大事を擧げんとするに臨みて、これ何の兆ぞ。さすがの燕王も心に之を惡みて色擇ばず、風聲・雨聲、竹折る、聲、樹裂くる聲、物凄じき天地を睥睨して、慘として隻語無く、王の左右もまた肅として言はず。時に道衍少しも驚かず、あな喜ばしの祥兆や、と白す。本より此の異僧道衍は、死生禍福の岐に惑ふが如き未達の者にはあらず、膽に毛も生ひたるべき不敵の逸物なれば、さきに燕王を勸めて事を起さしめんとしける時、燕王、彼は天子なり、民心の彼に向ふを奈何、とありけるに、昂然として答へて、臣は天道を知る、何ぞ民心を論ぜん、と云ひけるほどの豪傑なり。されども風雨簷瓦を墮す、時に取つての祥とも覺えられぬを、あな喜ばしの祥兆といへるは、餘りに強言に聞えければ、燕王も堪へかねて、和尚何といふぞや、

いづくにか祥兆たるを得ると、口を突いてそよろぎ罵る。道衍騒がず、殿下聞しめさずや、飛龍天に在れば、従ふに風雨を以てすと申す、瓦墜ちて碎けぬ、これ黄屋に易るべきのみ、と泰然として對へければ、王も頓に眉を開いて悦び、眾將も皆とよめき立つて勇みぬ、彼邦の制、天子の屋は、葺くに黄瓦を以てす、舊瓦は用無し、まさに黄なるに易るべし、といへる道衍が一語は、時に取つての活人劍、燕王宮中の士氣をして、勃然凜然、糾々然、直にまさに天下を呑まんとするの勢をなさしめぬ。

燕王は護衛指揮張玉朱能等をして壯士八百人をして入つて衛らしめぬ。矢石未だ交るに至らざるも、刀槍既に互に鳴る。都指揮使謝貴は七衛の兵、井びに屯田の軍士を率ゐて、王城を圍み、木柵を以て端禮門等の路を斷ちぬ。朝廷よりは燕王の爵を削るの詔、及び王府の官屬を逮ふべきの詔至りぬ。秋七月布政使張昇、謝貴と與に士卒を督して皆甲せしめ、燕府を圍んで、朝命により逮捕せらるべき王府の官屬を交附せんことを求む。一言の支吾あらんには、巖石鷄卵を壓するの勢を以て臨まんとするの狀を爲し、貴の軍の殺氣の進るところ、箭をば放つて府内に達するものすら有りたり。燕王謀つて曰く、吾が兵は甚だ寡く、彼の軍は甚だ多し、奈何せんと。朱能進んで曰く、先づ張昇謝貴を除かば、餘は能く爲す無き也と。王曰く、よし、貴を擒にせんと、

壬申の日、王、疾癒えぬと稱し、東殿に出で、官僚の賀を受け、人をして鬘と貴とを召さしむ。二人應ぜず。復内官を遣して、違はるべき者を交附するを装ふ。二人乃ち至る。衛士甚だ衆かりしも、門者呵して之を止め、鬘と貴とのみを入る。鬘と貴との入るや、燕王杖を曳いて坐し、宴を賜ひ酒を行り、寶盤に瓜を盛つて出す。王曰く、たましく新瓜を進むる者あり。卿等と之を嘗みんと。自ら一瓜を手にしけるが、忽にして色を作して罵つて曰く、今世間の小民だに、兄弟宗族、尙相互に恤ぶ、身は天子の親屬たり、而も且夕に其命を安んずること無し、縣官の我を待つこと此の如し、天下何事か爲す可からざらんや、と奮然として瓜を地に擲てば、護衛の軍士皆激怒して、前んで鬘と貴とを擒へ、かねて朝廷に内通せる葛誠盧振等を殿下に取つて押へたり。王こゝに於て杖を投じて起つて曰く、我何ぞ病まん、奸臣に迫らるゝ耳、とて遂に鬘貴等を斬る。鬘貴等の將士、二人が時を移して還らざるを見、始は疑ひ、後は覺りて、各々散じ去る。王城を圍める者も、首腦已に無くなりて、手足力無く、其兵おのづから潰えたり、張翼が部下北平都指揮の彭二、憤慨已む能はず、馬を躍らして大に市中に呼はつて曰く、燕王反せり、我に従つて朝廷の爲に力を盡すものは賞あらんと。兵千餘人を得て端禮門に殺到す。燕王の勇卒龐來興、丁勝の二人、彭二を殺しければ、其兵も亦散じぬ。此勢に乗せよやと、張玉、朱能等、いづれも塞

北に轉戦して元兵と相馳驅し、千軍萬馬の間に老い來れる者なれば、兵を率ゐて夜に乗じて突いて出で、黎明に至るまでに九つの門の其八を奪ひ、たゞ一つ下らざりし西直門をも、奸言を以て守者を散ぜしめぬ。北平既に全く燕王の手に落ちしかば、都指揮使の余瑛は、走つて居庸關を守り、馬宣は東して薊州に走り、宋忠は開平より兵三萬を率ゐて居庸關に至りしが、敢て進まずして、退いて懷來を保ちたり。

煙は旺んにして火は遂に燃えたり、劍は抜かれて血は既に流されたり、燕王は堂々として旗を進め馬を出しぬ。天子の正朔を奉せず、敢て建文の年號を去つて、洪武三十二年と稱し、道衍を帷幄の謀師とし、金忠を紀善として機密に參せしめ、張玉、朱能、丘福を都指揮僉事とし、張瑄部下にして内通せる李友直を布政司參議と爲し、乃ち令を下して諭して曰く、予は太祖高皇帝の子なり、今奸臣の爲に謀害せらる。祖訓に云はく、朝に正臣無く、内に奸逆あれば、必ず兵を擧げて誅討し以て君側の惡を清めよと。こゝに爾將士を率ゐて之を誅せんとなす。罪人既に得ば、周公の成王を輔くるに法とらん。爾等それ予が心を體せよと。一面には是の如くに將士に宣言し、又一面には書を帝に上りて曰く、皇考太祖高皇帝、百戰して天下を定め、帝業を成し、之を萬世に傳へんとして、諸子を封建したまひ、宗社を鞏固にして、磐石の計を爲したまへり。然るに奸

煙は旺んにして火は遂に燃えたり、劍は抜かれて血は既に流されたり、燕王は堂々として旗を

進め馬を出しぬ。天子の正朔を奉せず、敢て建文の年號を去つて、洪武三十二年と稱し、道衍を

帷幄の謀師とし、金忠を紀善として機密に參せしめ、張玉、朱能、丘福を都指揮僉事とし、張瑄

部下にして内通せる李友直を布政司參議と爲し、乃ち令を下して諭して曰く、予は太祖高皇帝の

子なり、今奸臣の爲に謀害せらる。祖訓に云はく、朝に正臣無く、内に奸逆あれば、必ず兵を擧

げて誅討し以て君側の惡を清めよと。こゝに爾將士を率ゐて之を誅せんとなす。罪人既に得ば、

周公の成王を輔くるに法とらん。爾等それ予が心を體せよと。一面には是の如くに將士に宣言し、

又一面には書を帝に上りて曰く、皇考太祖高皇帝、百戰して天下を定め、帝業を成し、之を萬世

に傳へんとして、諸子を封建したまひ、宗社を鞏固にして、磐石の計を爲したまへり。然るに奸

臣齊泰黃子澄、禍心を包蔵し、櫛、櫛、柏、桂、樾の五弟、數年ならずして、竝びに削奪せられぬ、柏や尤憫むべし、闔室みづから焚く、聖仁上に在り、胡ぞ寧そ此に忍ばん。蓋陛下の心に非ず、實に奸臣の爲す所ならん。心尙未だ足らずとし、又以て臣に加ふ。臣藩を燕に守ること二十餘年、實み畏れて小心にし、法を奉じ分に循ふ。誠に君臣の二分、骨肉の至親なるを以て、恆に思ひて愼を加ふ。而るに奸臣跋扈し、禍を無辜に加へ、臣が事を奏するの人を執へて、筆楚刺樂し、備さに苦毒を極め、迫りて臣不軌を謀ると言はしめ、遂に宋忠、謝貴、張曷等を北平城の内外に分ち、甲馬は街衢に馳突し、鉦鼓は遠邇に喧鞠し、臣が府を圍み守る。已にして護衛の人、貴曷を執へ、始めて奸臣欺詐の謀を知りぬ。竊に念ふに臣の孝康皇帝に於けるは、同父母兄弟なり、今陛下に事ふるは天に事ふるが如きなり。譬へば大樹を伐るに、先づ附枝を剪るが如し、親舊既に滅びなば、朝廷孤立し、奸臣志を得んには社稷危からん。臣伏して祖訓を觀るに云へることあり、朝に正臣無く、内に奸惡あらば、即ち親王兵を調して命を待ち、天子密かに諸王に詔し、鎮兵を統領して之を討平せしむと。臣謹んで俯伏して命を俟つ。と言辭を飾り、情理を綺へてぞ奏しける。道衍少きより學を好み詩を工にし、高啓を友とし善く、宋濂にも推獎され、迷慮子集十卷を世に留めしほどの文才あるものなれば、道衍や筆を執りけん、或は又金忠の輩や詞

を綴りけん、いづれにせよ、柔を外にして剛を懷き、己を護りて人を責むる、いと力ある文字なり。卒然として此書のみを讀めば、王に理ありて帝に情無くして王に情あるが如く、祖靈も民意も、帝を去り王に就く可きを覺ゆ。されども、擅に謝張を殺し、妄に年號を去る、何ぞ法を奉ずると云はんや。後苑に軍器を作り、密室に機謀を鍊る、これ分に循ふにあらず。君側の奸を掃はんと云ふと雖も、詔無くして兵を起し、威を恣にして地を掠む。其辭は則ち可なるも、其實は則ち非なり。諱つて思ふに齊泰黃子澄の輩の、必ず諸王を削奪せんとするも、亦理に於て缺け、情に於て薄し。夫れ諸王を重封せるは、太祖の意に出づ。諸王未だ必ずしも叛せざるに、先づ諸王を削奪せんとするの意を懷いて諸王に臨むは、上は太祖の意を壞り、下は宗室の親を破るなり。三年父の志を改めざるは、孝といふべし。太祖崩じて、抔土未だ乾かず。直に其意を破り、諸王を削奪せんとするは、是れ理に於て缺け情に於て薄きものにあらずして何ぞや。齊黃の輩の爲さんとするところは是の如くなれば、燕王等手を袖にし息を屏ぐるも亦削奪罪責を免れざらんとす。太祖の血を承けて、英雄傑特の氣象あるもの、いづくんぞ俛首して冤に服するに忍びんや。瓜を投じて怒罵するの語、其中に機關ありと雖も、又盡く偽詐のみならず、本より眞情の人に逼るに足るものあるなり。畢竟兩者各、理あり、各、非理ありて、争鬪則ち起り、各、

情なく、各々眞情ありて、戰鬪則ち生せるもの、今に於て誰か能く其の是非を判せんや。高巍の説は、敦厚悦ぶ可しと雖も、時既に晩く、卓敬の言は、明徹用ゐるに足ると雖も、勢回し難く、朝旨の酷責すると、燕師の暴起すると、實に互に已む能はざるものありしなり。是れ所謂數なるものか、非耶。

燕王の兵を起したる建文元年七月より、惠帝の國を遷りたる建文四年六月までは、烽煙劍光の史にして、今一々に之を記するに懶し。其詳を知らんとするものは、明史及び明朝紀事本末等に就きて考ふべし。今たゞ其概略と燕王惠帝の性格風手を知る可きものとを記せん。燕王もと智勇天縱、且夙に征戰に習ふ。洪武二十三年太祖の命を奉じ、諸王と共に元族を漠北に征す。秦王晉王は怯にして敢て進まず、王將軍傅友德等を率ゐて北出し、迤都山に至り、其將乃兒不花を擒にして還る。太祖大に喜び、此より後屢々諸將を帥ゐて出征せしむるに、每次功ありて、威名大に振ふ。王既に兵を知り戰に慣る。加ふるに道衍ありて、機密に參し、張玉、朱能、丘福ありて爪牙と爲る。丘福は謀畫の才張玉に及ばずと雖も、樸直猛勇、深く敵陣に入りて敢戰死闘し、戰終つて功を獻するや必ず人に後る。古の大樹將軍の風あり。燕王をして、丘將軍の功は我之

を知る、と歎美せしむるに至る。故に王の功臣を賞するに及びて、福其首たり、洪國公に封ぜらる。其他將士の驚悍驚雄の者も、亦甚だ少からず。燕王の大事を舉ぐるも、蓋し胸算あるなり。燕王の張昇謝貴を斬つて叛を取つてするや、郭資を留めて北平を守らしめ、直に師を出して通州を取り、先づ薊州を定めずんば、後顧の患あらんと云へる張玉の言を用ゐ、玉をして之を略せしめ、次で夜襲して遷化を降す。此皆開平の東北の地なり。時に余瑛居庸關を守る。王曰く、居庸は險隘にして、北平の咽喉也、敵此に據るは、是れ我が背を拊つなり。急に取らざる可からずと、乃ち徐安、鍾祥等をして瑛を撃つて、懷來に走らしむ。宗忠懷來に在り、兵三萬と號す。諸將之を撃つを難んず。王曰く、彼眾く、我寡し、然れども彼新に集まる、其心未だ一ならず、之を撃たば必らず破れんと。精兵八千を率ゐ、甲を捲き道を倍して進み、遂に戰つて克ち、忠と瑛とを獲て之を斬る。こゝに於て諸州燕に降る者多く、永平、樂州また燕に歸す。大寧の都指揮卜萬松亭關を出で、沙河に駐まり、遷化を攻めんとす。兵十萬と號し、勢やゝ振ふ。燕王反閑を放ち、萬の都將陳亨、劉貞をして萬を縛し獄に下さしむ。

帝黃子澄の言を用ゐ、長興侯耿炳文を大將軍とし、李堅、寧忠を副へて北伐せしめ、又安陸侯吳傑、江陰侯吳高、都督都指揮盛庸、潘忠、楊松、顧成、徐凱、李文、陳暉、平安等に命じ、諸

道竝び進みて、直に北平を擣かしむ。時に帝諸將士を誡めたまはく、昔蕭繹、兵を擧げて京に入らんとす、而も其下に令して曰く、一門の内自ら兵威を極むるは、不祥の極なりと、今爾將士、燕王と對壘するも、務めて此意を體して、朕をして叔父を殺すの名あらしむるなかれと。蕭繹は梁の孝元皇帝なり。今梁書を按ずるに、此事を載せず、蓋し元帝兵を擧げて賊を誅し京に入らんことを圖る。時に河東王譽、帝に従はず、卻つて帝の子方等を殺す。帝鮑泉を遣りて之を討たしめ、又王僧辯をして代つて將たらしむ。帝は高祖武帝の第七子にして、譽は武帝の長子にして文選の撰者たる昭明太子統の第二子なり、一門の語、譽を征するの時に當りて發するか。建文帝の仁柔の性、宋襄に近きものありといふべし。それ燕王は叔父たりと雖も、既に爵を削られて庶人たり、庶人にして兇器を弄し王師に抗す、其罪本より誅戮に當る。然るに是の如きの令を出征の將士に下す。これ適以て軍旅の銳を殺ぎ、黽黽の膽を小にするに過ぎざるのみ、智なりといふ可からず。燕王と戰ふに及びて、官軍時に或は勝つあるも、此令あるを以て、飛箭長槍、燕王を覆すに至らず。然りと雖も、小人の過や刻薄、長者の過や寛厚、帝の過を觀て帝の人となりを知るべし。

八月耿炳文等兵三十萬を率ゐて眞定に至り、徐凱は兵十萬を率ゐて河間に駐まる。炳文は老將

にして、太祖創業の功臣なり。かつて張子誠に當りて、長興を守ること十年、大小數十戰、戰つて勝たざる無く、終に士誠をして志を違しくする能はざらしめしを以て、太祖の功臣を榜列するや、炳文を以て大將軍徐達に附して一等となす。後又、北は塞を出でて元の遺族を破り、南は雲南を征して蠻を平らげ、或は陝西に、或は蜀に、旗幟の向ふ所、毎に功を成す。殊に洪武の末に至つては、元勳宿將多く凋落せるを以て、炳文は朝廷の重んずるところたり。今大兵を率ゐて北伐す。時に年六十五、樹老いて材愈々堅く、將老いて軍益々固し、然れども不幸にして先鋒楊松、燕王の爲に不意を襲はれて雄縣に死し、潘忠到り援はんとして月漾橋の伏兵に執へられ、武將張保敵に降りて其の利用するところとなり、遂に滹沱河の北岸に於て、燕王及び張玉、朱能、譚淵、馬雲等の爲に大に敗れて、李堅、齊忠、顧成、刻燧を失ふに至れり。たゞ炳文の陣に熟せる、大敗して而も潰えず、眞定城に入りて門を圍ちて堅く守る。燕兵勝に乗じて城を圍む三日、下す能はず。燕王も炳文が老將にして破り易からざるを知り、圍を解いて還る。

炳文の一敗は猶復すべし、帝炳文の敗を聞いて怒りて用ゐず、黃子澄の言によりて、李景隆を大將軍とし斧鉞を賜はつて炳文に代らしめたまふに至つて、大事ほとんど去りぬ。景隆は執務の子弟、趙括の流なればなり。趙括を擧げて廉頗に代ふ。建武帝の位を保つ能はざる、兵戰上には

實に此に本づく。炳文の子孫は、帝の父懿文太子の長女江都公主を妻とす。懿父の復用みられざるを憤ること甚しかりしといふ。又増の弟嶽、遼東の鎮守吳高、都指揮使楊文と與に兵を率ゐて永平を圍み、東より北平を動かさんとしたりといふ。二子の護國の意の誠なるも知るべし。それ勝敗は兵家の常なり、蘇東坡が、所謂善く突する者も日に勝つて日に敗るゝものなり。然るに一敗の故を以て、老将を退け、驕兒を擧ぐ、燕王手を拍つて笑つて、李九江は膏梁の堅子のみ、未だ嘗て兵に習ひ陣を見ず、輒ち予ふるに五十萬の衆を以てす、是自ら之を坑にする也、と云へるもの、酷語といへども當らずんばあらず。炳文を召して回らしめたる、まことに歎ずべし。

景隆小字は九江、勳業あるにあらずして大將軍となれる者は何ぞや。黃子澄、齊泰の薦むるに因るも、又別に所以有るなり。景隆は李文忠の子にして、文忠は太祖の姉の子にして且つ太祖の子となりしものなり。之に加ふるに文忠は器量沈厚、學を好み經を治め、其の家居するや恂々として儒者の如く、而も甲を擧ぎ馬に騎り槊を横たへて陣に臨むや、陣風發、大敵に遇ひて益壯に、年十九より軍に従ひて屢々偉功を立て、創業の元勳として太祖の愛重するところとなれるのみならず、西安に水道を設けては人を利し、應天に田租を減じては民を惠み、誅戮を少くすることを勸め、宦官を盛にすることを諫め、洪武十五年、太祖日本懷良王の書に激して之を討たん

とせるを止め、懷良王、明史に良懷に作るは蓋し誤也。懷良王は、後醍醐帝の皇子、延元三年、征西大將軍に任じ、筑紫を鎮撫す。菊池武光等之に従ひ、興國より正平に及び、勢威大に張る。明の太祖の邊海毎に和寇に擾さるゝを怒りて洪武十四年、日本を征せんとするを以て威嚇するや、王答ふるに書を以てす。其略に曰く、乾坤は浩蕩たり、一主の獨權にあらず、宇宙は寛洪なり、諸邦を作して以て分守す。蓋し天下は天下にして、一人の天下にあらざる也。吾聞く、天朝戰を興すの策ありと、小邦亦敵を禦ぐの圖あり。豈、背て途に跪いて之を奉ぜんや。之に順ふも未だ其生を必せず、之に逆ふも未だ其死を必せず、相逢ふ賀蘭山前、聊以て博戲せん、吾何をか懼れんやと。太祖書を得て慍ること甚だしく、眞に兵を加へんとするの意を起したるなり。洪武十四年は我が南朝弘和元年に當る。時に王既に今川了俊の爲に壓迫せられて衰勢に陥り、征西將軍の職を後村上帝の皇子良成王に譲り、筑後矢部に閑居し、讀經禮佛を事として、兵政の務をば執りたまはず、年代編纂するに似たり。然れども王と明との交渉は夙に正平の末より起りしことなれば、王の裁斷を以て答書ありしならん。此事我が國に史料全く缺け、大日本史も亦載せずと雖も、彼の史にして彼の威を損ずるの事を記す、決して無根の浮譚にあらず。一個優秀の風格、多く得可からざるの人なり。洪武十七年、疾を得て死するや、太祖親しく文を爲りて祭を致

し、岐陽王に追封し、武靖と諡し、太廟に配享したり。景隆は是の如き人の長子にして、其父の蓋世の武勳と、帝室の親眷との關係よりして、齊黃の薦むるところ、建文の任ずるところとなりて、五十萬の大軍を統ぶるには至りしなり。景隆は長身にして眉目疎秀、雍容都雅、顧盼偉然、率爾に之を望めば大人物の如くなりしかば、屢出でて軍を湖廣陝西河南に鍊り、左軍都督府事となりたるほかには、爲すところも無く、其功としては周王を執へしのみ過ぎざれど、帝をはじめ大臣等これを大器としたりしならん。然れども虎皮にして羊質、所謂治世の好將軍にして、戰場の眞豪傑にあらず、血を蹀み劍を揮ひて進み、劍を裹み齒を切つて鬪ふが如き經驗は、未だ曾て積まざりしなれば、燕王の笑つて評せしもの、實に其眞を得たりしなり。

運

命

李景隆は大兵を率ゐて燕王を伐たんと北上す。帝は猶北方憂ふるに足らずとして意を文治に専らにし、儒臣方孝孺等と周官の法度を討論して日を送る。此間に於て監察御史韓郁（韓郁或は康郁に作る）といふもの時事を憂ひて疎を上りぬ。其の意、黃子澄齊泰を非として、殘酷の醫儒となし、諸王は太祖の遺體なり、孝康の手足なりとなし、之を待つことの厚からずして、周王湘王代王齊王をして不幸ならしめたるは、朝廷の爲に計る者の過にして、是れ則ち朝廷激して之を變ぜしめたるなりと爲し、諺に曰く、親者之を割けども斷たず、疎者之を續けども堅からずと、是

運

殊に理有る也となし、燕の兵を擧ぐるに及びて、財を靡し兵を損して而して功無きものは國に謀臣無きに近しとなし、願はくは齊王を釋し、湘王を封じ、周王を京師に還し、諸王世子をして書を持し燕に勸め、干戈を罷め、親戚を教うしたまへ、然らずんば臣愚おもへらく十年を待たずして必ず噬臍の悔あらん、といふに在り。其の論、彝倫を教くし、動亂を鎮めんといふは可なり、齊泰黃子澄を非とするも可なり、たゞ時既に去り、勢既に成るの後に於て、此言あるも、嗚呼亦晩かりしなり。帝遂に用ゐたまはず。

命

景隆の炳文に代るや、燕王其の五十萬の兵を恐れずして、其の五敗兆を具せるを指摘し、我之を擒にせんのみ、と云ひ、諸將の言を用ゐずして、北平を世子に守らしめ、東に出でて、遼東の江陰侯吳高を永平より逐ひ、轉じて大寧に至りて之を抜き、寧王を擁して關に入る。景隆は燕王の大寧を攻めたるを聞き、師を帥ゐて北進し、遂に北平を圍みたり。北平の李讓、梁明等、世子を奉じて防守甚だ力むと雖も、景隆が軍衆くして、將も亦雄傑なきにあらず、都督瞿能の如き、張掖門に殺入して大に威勇を奮ひ、城殆ど破る。而も景隆の器の小なる、能の功を成すを喜ばず、大軍の至るを俟ちて俱に進めと令し、機に乗じて突至せず。是に於て守る者便を得、連夜水を汲みて城壁に灌げば、天寒くして忽ち氷結し、明日に至れば復登ることを得ざるが如きことありて、

燕王は豫め景隆を吾が堅城の下に致して之を殲さんことを期せしに、景隆既に穀に入り來りぬ、何ぞ箭を放たざらんや。大寧より還りて會州に至り、五軍を立てて、張玉を中軍に、朱能を左軍に、李彬を右軍に、徐忠を前軍に、降將房寬を後軍に將たらしめ、漸く南下して京軍と相對したり。十一月、京軍の先鋒陳暉、河を渡りて東す。燕王兵を率ゐて至り、河水の渡り難きを見て黙禱して曰く、天若し予を助けんには、河水氷結せよと。夜に至つて氷果して合す。燕の師勇躍して進み、暉の軍を破る。景隆の兵動く。燕王左右軍を放つて夾撃し、遂に連りに其七營を破つて景隆の營に逼る。張玉等も陣を列ねて進むや、城中も亦兵を出して、内外交攻む。景隆支ふる能はずして遁れ、諸軍も亦糧を棄てて奔る。燕の諸將是に於て頓首して王の神算及ぶ可からずと賀す。王曰く、偶中のみ、諸君の言へるところに皆萬全の策なりしなりと。前には斷じて後には謙す。燕王が英雄の心を嚮るも巧なりといふべし。

景隆が大軍功無くして、退いて德州に屯す。黃子澄其敗を奏せざるを以て、十二月に至つて御つて景隆に太子太師を加ふ。燕王は南軍をして苦寒に際して奔命に疲れしめんが爲に、師を出して廣昌を攻めて之を降す。前に疏を上りて、諸藩を削るを諫めたる高嶽は、言用ゐられず、事遂に發して天下動亂に至り

たるを憚き、書を上りて、臣願はくは燕に使用して言ふところあらんと請ひ、許されて燕に至り、書を燕王に上りたり、其略に曰く、太祖升遐したまひて意はざりき大王と朝廷と隙あらんとは。臣おもへらく干戈を動かすは和解に若かずと。願はくは死を度外に置きて、親しく大王に見えん。昔周公流言を聞きては、即ち位を避けて東に居たまひき。若し大王能く首計の者を斬りたまひ、護衛の兵を解き、子孫を質にし、骨肉猜忌の疑を釋き、殘賊離聞の口を塞ぎたまはば、周公と臨んなることを比すべきにはあらずや。然るを、爾こゝに及ばせたまはば甲兵を興し疆宇を襲ひたまふ。されば事に任ずる者、口に藉くことを得て、殿下文臣を誅することを假りて實は漢の吳王の七國に倡へて鼻錯を誅せんとしむに倣はんと欲したまふと申す。今大王北平に據りて數郡を取らたまふと雖も、數月以來にして、尙蕪爾たる一隅の地を出づる能はず、較ぶるに天下を以てすれば、十五にして未だ其一をも有したまはず、大王の將士も、亦疲れずといはんや。それ大王の統べたまふ將士も、大約三十萬には過ぎざらん。大王と天子と、義は則ち君臣たり、親は則ち骨肉たるも、尙離れ聞たりたまふ、三十萬の異姓の士、など必ずしも終身困迫して殿下の爲に死し申すべきや。魏が念こゝに至るごとに大王の爲に流涕せずんばあらざる也。願はくは大王臣が言を信じ、上表謝罪し、甲を投き兵を休めたまはば、朝廷も必ず寛宥あり、天人共に悦びて、太

祖在天の靈も亦安んじたまはん。倘迷を執りて回らず、小勝を待み、大義を忘れ、寡を以て眾に抗し、爲す可からざるの悖事を僥倖するを敢てしたまはば、臣大王の爲に言すべきところを知らざる也。況んや、大喪の期末だ終らざるに、無辜の民驚きを受く。仁を求め國を護るの義と、逕庭あるも亦甚し。大王に朝廷を肅清するの誠意おはすと、天下に嫡統を篡奪するの批議無きにあらじ。もし幸にして大王敗れたまはずして功成りたまはば、後世の公論、大王を如何の人と謂ひ申すべきや。魏は白髮の書生、蜉蝣の微命、もとより死を畏れず。洪武十七年、太祖高皇帝の御恩を蒙りて、臣が孝行を旌したまふを辱くす。魏既に孝子たり、當に忠臣たるべし。孝に死し忠に死するは魏の至願也。魏幸にして天下の爲に死し、太祖在天の靈に見ゆるを得ば、魏も亦以て愧無かるべし。魏至誠至心、直語して諱まず、尊嚴を冒瀆す、死を賜ふも悔無し、願はくは大王今に於て再思したまへ。と憚るところ無く白しける。されど燕王答へたまはねば、數次書を上りけるが、皆效無かりけり。

魏の書、人情の純、道理の正しきところより言を立つ。知らず燕王の此に對して如何の感を爲せるを。たゞ燕王既に兵を起し戦を開く、魏の言善しと雖も、大河既に決す、一葦の支へ難きが如し。しかも魏の誠を盡し志を致す、其意と其言と、忠孝敦厚の人たるに負かず、數百歳の後、

猶讀む者をして愴然として感ずるあらしむ。魏と韓郁とは、建文の時に於て、人情の純、道理の正に據りて、言を爲せる者也。

年は新になりて建文二年となりぬ。燕は洪武三十三年と稱す。燕王は正月の酷寒に乗じて蔚州を下し、大同を攻む。景隆師を出して之を救はんとすれば、燕王は速く居庸關より入りて北平に還り、景隆の軍、寒苦に惱み、奔命に疲れて、戦はずして自ら敗る。二月、韃靼の兵來りて燕を助く。蓋し春暖に至れば景隆の來り戦はんことを慮りて、燕王の請へるなり。春闈にして、南軍勢を生じぬ。四月朔、景隆兵を德州に會す、郭英、吳傑は眞定に進みぬ。帝は魏國公徐輝祖をして、京軍三萬を帥りて疾驅して軍に會せしむ。景隆、郭英、吳傑等、軍六十萬を合し、百萬と號して白溝河に次す。南軍の將平安驍勇にして、嘗て燕王に従ひて塞北に戦ひ、王の兵を用ゐるの虚實を識る。先鋒となりて燕に當り、矛を揮ひて進む。瞿能父子も亦勇躍して戦ふ。二將の向ふ所、燕兵披靡す。夜、燕王、張玉を中軍に、朱能を左軍に、陳亨を右軍に、丘福を騎兵に將とし、馬歩十餘萬、黎明に畢く河を渡る。南軍の瞿能父子、平安等房寬の陣を擣いて之を破る。張玉等之を見て懼色あり。王曰く、勝敗は常事のみ、日中を過ぎずして必ず諸君の爲に敵を破

らんと。即ち精銳數千を麾いて敵の左翼に突入す。王の子高煦、張玉等の軍を率ゐて齊しく進む。兩軍相争ひ、一進一退す。賊聲天に震ひ、飛矢雨の如し。王の馬、三たび創を被り、三たび之を易ふ。王善く射る。射るところの箭、三簾皆盡く、乃ち劍を提げて、眾に先だちて、敵に入り、左右奮撃す。劍鋒折れ缺けて、撃つに堪へざるに至る。瞿能と相遇ふ。幾んど能の爲に及ばる。王急に走りて隄に登り、伴つて鞭を麾いで、後繼者を招くが如くして纒に免れ、而して復衆を率ゐて馳せて入る。平安善く槍刀を用ゐ、向ふ所敵無し。燕將陳亨、安の爲に斬られ、徐忠亦創を被る。高煦急を見、精騎數千を帥ゐ、前んで王と合せんとす。瞿能また猛襲し、大呼して曰く、燕を滅せんと。たましく旋風突發して、南軍の大將の旗を折る。南軍の將卒相視て驚き動く。王これに乗じ、勁騎を以て繞つて其後に出で、突入馳撃し、高煦の騎兵と合し、瞿能父子を亂軍の裏に殺す。平安は朱能と戰つて亦敗る。南將俞通淵、勝聚等皆死す。燕兵勢に乗じて營に逼り火を縱つ。急風火を扇る。是に於て南軍大に潰え、郭英等は西に奔り、景隆は南に奔る。器械輜重、皆燕の獲るところとなり、南兵の横尸百餘里に及ぶ。所在の南師、聞く者皆解體す。此戰、軍を全くして退く者、徐輝祖あるのみ。瞿能、平安等、驍將無きにあらずと雖も、景隆凡器にして將材にあらず。燕王父子、天縱の豪雄に加ふるに、張玉、朱能、丘福等の勇烈を以てす。北軍

の克ち、南軍の潰ゆる、まことに所以ある也。

山東參政鐵鉉は儒生より身を起し、嘗て疑獄を斷じて太祖の知を受け、鼎石といふ字を賜はりたる者なり。北征の師の出づるや、餉を督して景隆の軍に赴かんとしけるに、景隆の師潰えて、諸州の城堡皆風を望みて燕に下るに會ひ、臨邑に次りたるに、參軍高巍の南歸するに遇ひたり。偕に是れ文臣なりと雖も、今武事の日に當り、目前に官軍の大に敗れて、賊威の熾んに張るを見る、感憤何ぞ極まらん。巍は燕王に書を上りしも效無かりしを歎ずれば、鉉は忠臣の節に死する少きを憤る。慨世の哭、憂國の涙、二人相持して泣然として泣きしが、乃ち酒を酌みて共に盟ひ、死を以て自ら誓ひ、濟南に趨りてこれを守りぬ。景隆は奔りて濟南に依りぬ。燕王は勝に乗じて諸將を進ましめぬ。燕兵の濟南に至るに及びて、景隆尙十餘萬の兵を有せしが、一戰に復敗られて單騎走り去りぬ。燕師の勢、旺んにして城を屠らんとす。鐵鉉、左都督盛庸、右都督陳暉等と力を盡して捍ぎ、志を堅うして守り、日を経れども屈せず、事聞えて、鉉を山東布政司使と爲し、盛庸を大將軍と爲し、陳暉を副將軍に陞す。景隆は召還されしが、黃子澄、練子寧は之を誅せずんば何を以て宗社に謝し將士を勵まさんと云ひしも、帝卒に問ひたまはず、燕王は濟南を圍むこと三月に至り、遂に下すこと能はず。乃ち城外の諸溪の水を堰きて灌ぎ、一城の士を魚

とせんとす、城中是に於て大に安んぜず。鉞曰く、懼るゝ勿れ、吾に計ありと。千人を遣りて詐りて降らしめ、燕王を迎へて城に入らしめ、豫て壯士を城上に伏せて、王の入るを俟ひて大鐵板を墜して之を撃ち、又別に伏を設けて橋を斷たしめんとす。燕王計に陥り、馬に乗じ蓋を張り、橋を渡り城に入る。大鐵板驥に下る。たゞ少しく早きに失して、王の馬首を傷つく、王驚きて馬を易へて馳せて出づ。橋を斷たんとす。橋甚だ堅し。未だ斷つに及ばずして、王竟に逸し去る。燕王幾んど死して幸に逃る。天助あるものの如し。王大に怒り、巨礮を以て城を撃たしむ。城壁破れんとす。鉞愈々屈せず、太祖高皇帝の神牌を書して城上に懸けしむ。燕王敢て撃たしむる能はず。鉞又數々不意に出でて壯士をして燕兵を脅かさしむ。燕王憤ること甚しけれども、計の出づるところ無し。道術書を馳せて曰く、師老いたり。請ふ暫らく北平に還りて後舉を圖りたまへと。王國を撤して還る。鉞と盛庸等と勢に乗じて之を追ひ、遂に德州を回復し、官軍大に振ふ。鉞是に於て擢でられて兵部尙書となり、盛庸は歷城侯となりたり。

盛庸は初め耿炳文に従ひ、次で李景隆に従ひしが、洪武中より武官たりしを以て、兵馬の事に習ふ。濟南の防禦、德州の回復に、其の材を認められて、平燕將軍となり、陳暉、平安、馬溥、徐眞等の上に立ち、吳傑、徐凱等と與に燕を伐つの任に當りぬ。庸乃ち吳傑、平安をして西の方

定州を守らしめ、徐凱をして東の方滄州に屯せしめ、自ら德州に駐まり、犄角の勢を爲して漸く燕を壓めんとす。燕王、德州の城の、修築已に完く、防備も亦嚴にして破り難く、滄州の城の潰え圯るゝこと久しくして破り易きを思ひ、之を下して庸の勢を殺がんと欲す。乃ち陽に遼東を征するを令して、徐凱をして備へざらしめ、天津より直沽に至り、俄に河に沿ひて南下するを令す。軍士猶知らず、其の東を征せんとして而して南するを疑ふ。王嚴命して疾行すること三百里、途に偵騎に遇へば、盡く之を殺し、一晝夜にして曉に比びて滄州に至る。凱の燕師の到れるを覺りし時には、北卒四面より急攻す。滄州の眾皆驚きて防く能はず、張玉の肉薄して登るに及び、城遂に拔かれ、凱と程遷、俞琪、趙濟等皆獲らる。これ實に此年十月なり。

十二月、燕王河に循ひて南す。盛庸兵を出して後を襲ひしが及ばざりき。王遂に臨清に至り、館陶に屯し、次で大名府を掠め、轉じて汶上に至り、濟寧を掠めぬ。盛庸と鐵鉞とは兵を率ゐて其後を躡み、東昌に營したり。此時北軍卻つて南に在り南軍卻つて北に在り。北軍南軍相戦はざるを得ざるの勢成りて東昌の激戦は遂に開かれぬ。初は官軍の先鋒孫霖、燕將朱榮、劉江の爲に敗れて走りしが、兩軍持重して、主力動かざること十日を越ゆ。燕師いよく東昌に至るに及んで、盛庸、鐵鉞牛を宰して將士を犒ひ、義を唱へ眾を勵まし、東昌の府城を背にして陣し、密

に火器毒弩を列ねて、肅として敵を待つたり。燕兵もと勇にして毎戦毎勝す、庸の軍を見るや鼓譟して薄る。火器電の如くに發し、毒弩雨の如くに注げば、虎狼鬪梟、皆傷つて倒る。又平安の兵の至るに會ふ。庸是に於て兵を麾いて大に戰ふ。燕王精騎を率めて左翼を衝く。左翼動かずして入る能はず。轉じて中堅を衝く。庸陣を開いて王の入るに縱せ、急に閉ぢて厚く之を圍む。燕王衝撃甚だ力むれども出づることを得ず。殆んど其の獲るところとならんとす。朱能、周長等、王の急を見、韃韃騎兵を縱つて庸の軍の東北角を撃つ。庸之を禦がしめ、圍やゝ緩む。能衛いて入つて死戦して王を翼けて出づ。張玉も亦王を救はんとし、王の已に出でたるを知らず、庸の陣に突入し、縱横奮撃し、遂に惡鬪して死す。官軍勝に乗じ、殘孽萬餘人、燕軍大に敗れて奔る。庸兵を縱つて之を追ひ、殺傷甚だ多し。此役や、燕王數々危し、諸將帝の詔を奉ずるを以て、刃を加へず。燕王も亦之を知る。王騎射尤も精し、追ふ者王を斬るを敢てせずして、王の射て殺すところとなる多し。適、高煦、華聚等を率めて至り追兵を撃退して去る。

燕王張玉の死を聞きて痛哭し、諸將と語るごとに、東昌の事に及べば、曰く、張玉を失ふより、吾今に至つて寢食安からずと。涕下りて已まず。諸將も皆泣く。後、功臣を賞するに及びて、張玉を第一とし、河間王に追封す。

初め燕王の師出づるや、道衍曰く、師は行いて必ず克たん、たゞ兩日を費すのみと。東昌より還るに及びて、王多く精銳を失ひ、張玉を亡ふを以て、意稍休まんことを欲す。道衍曰く、兩日は昌也、東昌の事了る。此より全勝ならんのみと。益、士を募り、勢を鼓す。建文三年二月、燕王自ら文を撰し、洗滌して陣亡の將士張玉等を祭り、服するところの袍を脱して之を焚き、以て亡者に衣するの意をあらはし、曰く其れ一絲と雖もや、以て余が心を識れと。將士の父兄子弟之を見て、皆感泣して、王の爲に死せんと欲す。

燕王遂に復師を帥めて出づ。諸將士を諭して曰く、戰の道、死を懼るゝ者は必ず死し、生を捐つる者は必ず生く。爾等努力せよと。三月、盛庸と夾河に遇ふ。燕將譚淵、董中峰等、南將莊得と戰つて死し、南軍亦莊得、楚知、張皂旗等を失ふ。日暮れ、各、兵を斂めて營に入る。燕王十餘騎を以て庸の營に逼つて野宿す。天明く、四面皆敵なり。王從容として去る。庸の諸將相顧みて愕き出るも、天子の詔、朕をして叔父を殺すの名を負はしむる勿れの語あるを以て、矢を發つて敢てせず。此日復戰ふ。辰より未に至つて、兩軍互に勝ち互に負く。忽にして東北風大に起り、砂礫面を撃つ。南軍は風に逆ひ、北軍は風に乘ず、燕軍吶喊鉦鼓の聲地を振ひ、庸の軍當る

能はずして大に敗れ走る。燕王戰罷んで營に還るに、塵土滿面、諸將も識る能はず、語聲を聞いて王なるを覺りしといふ。王の黄埃天に漲るの中に在つて馳驅奔突して叱咤號令せしの狀、察す可きなり。

吳傑、平安は、盛庸の軍を援けんとして、眞定より兵を率ゐて出でしが、及ばざること八十里にして庸の敗れしことを聞きて還りぬ。燕王、眞定の攻め難きを以て、燕軍は回出して糧を取り營中備無しと言はしめ、傑等を誘ふ。傑等之を信じて、遂に漳沱河に出づ。王河を渡り流に沿ひて行くこと二十里、傑の軍と薬城に遇ふ。實に閏三月己亥なり。翌日大に戰ふ。燕將薛祿、奮闘甚だ力む。王騎騎を率ゐて、傑の軍に突入し、大呼猛撃す。南軍箭を飛ばす雨の如く、王の建つるところの旗、集矢蝟毛の如く、燕軍多く傷つく。而も王猶屈せず、衝撃愈々急なり。會々また暴風起り、樹を抜き屋を蹴す。燕軍之に乗じ、傑等大に潰ゆ。燕軍追ひて眞定城下に至り、驍將鄧敏、陳鵬等を擒にし、斬首六萬餘級、盡く軍資機械を得たり。王其の旗を北平に送り、世子に諭して曰く、善く之を藏し、後世をして忘る勿らしめよと。旗世子の許に至る。時に降將顧成座に在りて之を見る。成は操舟を業とする者より出づ。魁岸勇偉、臂力絶倫、滿身の花文、人を驚かして自ら異にす。太祖に従つて、出入離れず。嘗て太祖に随つて出でし時、巨舟砂に膠して

動かさず。成即便舟を負ひて行きしことあり。鎮江の戰に、執へられて縛せらるゝや、勇躍して縛を斷ち、刀を持てる者を殺して脱歸し、直に眾を導いて城を陥しゝことあり。勇力察す可し、後戦功を以て累進して將となり、蜀を征し、雲南を征し、諸蠻を平らげ、雄名世に布く。建文元年耿炳文に従ひて燕と戰ふ。炳文敗れて、成執へらる。燕王自ら其縛を解いて曰く、皇考の靈、汝を以て我に授くるなりと。因つて兵を擧ぐるの故を語る。成感激して心を歸し、遂に世子を輔けて北平を守る。然れども多く謀畫を致すのみにして、終に兵を將ゐて戰ふを肯んぜず、兵器を賜ふも亦受けず。蓋し中年以後、書を讀んで得るあるに因る。又一種の人なり。後、太子高熾の羣小の爲に苦めらるゝや、告げて曰く、殿下は但當に誠を竭して孝敬に、孳々として民を恤みたまふべきのみ、萬事は天に在り、小人は意を措くに足らずと。識見亦高しといふべし。成は是の如き人なり。旗を見るや、愴然として之を壯とし、涙下りて曰く、臣少きより軍に従ひて今老いたり、戦陣を歴たること多きも、未だ嘗て此の如きを見ざるなりと。水滸傳中の人の如き成をして此言を爲さしむ、燕王も亦惡戰したりといふべし。而して燕王の豪傑の心を攬る所以のもの、實に王の此の勇往邁進、艱危を冒して肯て避けざるの雄風にあらざんばあらざる也。

四月、燕兵大名に次す。王、齊泰と黃子澄との斥けらるゝを聞き、書を上りて、吳傑、盛庸、

平安の眾を召還せられんことを乞ひ、然らずんば兵を擧ぐ能はざるを言ふ。帝大理少卿薛嵩を遣りて、燕王及び諸將士の罪を赦して、本國に歸らしむる事を詔し、燕軍を散せしめて、而して大軍を以て其後に躡かしめんとす。嵩到りて卻つて燕王の機略威武の服するところとなり、歸つて燕王の語直にして意誠なるを奏し、皇上權奸を誅し、天下の兵を散じたまはし、臣單騎闕下に至らんと、云へる燕王の語を奏す。帝方孝孺に語りたまはく、賊に嵩の言の如くならば、齊黃我を誤るなりと。孝孺惡みて曰く、嵩の言、燕の爲に游説するなりと。五月、吳傑、平安、兵を發して北平の糧道を斷つ。燕王、指揮武勝を遣りて、朝廷兵を罷むるを許したまひて、而て糧を絶ち北を攻めしめたまふは、前詔と背馳すと奏す。帝書を得て兵を罷むるの意あり。方孝孺に語りたまはく、燕王は孝康皇帝同産の弟なり、朕の叔父なり、吾他日宗廟神靈に見えざらんやと。孝孺曰く、兵一たび散ずれば、急に聚む可からず。彼長驅して闕を犯さば、何を以て之を禦かん、陛下惑ひたまふなかれと。勝を錦衣獄に下す。燕王聞て大に怒る。孝孺の言、眞に然り、而して建文帝の情、亦教しといふべし。畢竟南北相戰ふ、調停の事、復爲す能はざるの勢に在り、今に於て兵戈の慘を除かんとするも、五色の石、聖手にあらざるよりは、之を鍊ること難きなり。此月燕王指揮李遠をして輕騎六千を率ゐて徐沛に詣り、南軍の資糧を焚かしむ。李遠、丘福、

薛録と策應して、能く功を收め、糧船數萬艘、糧數百萬を焚く。軍資器械、俱に燬盡となり、河水盡く熱きに至る。京師これを聞きて大に震駭す。

七月、平安兵を率ゐて眞定より北平に到り、平村に營す。平村は城を距る五十里のみ。燕王の世子、危きを告ぐ。王劉江を召して策を問ふ。江乃ち兵を率ゐて滹沱を渡り、旗幟を張り、火炬を擧げ、大に軍容を壯にして安と戰ふ。安の軍敗れ、安還つて眞定に走る。

方孝孺の門人林嘉猷、計をもつて燕王父子をして相疑はしめんとす。計行はれずして已む。盛庸等、大同の守將房昭に檄し、兵を引いて紫荆關に入り、保定の諸縣を略し、兵を易州の西水寨に駐め、險に據りて持久の計を爲し、北平を窺はしめんとす。燕王これを聞きて、保定失はれんには北平危しとて、遂に命を下して師を班す。八月より九月に至り、燕兵西水寨を攻め、十月眞定の援兵を破り、併せて寨を破る。房昭走りて死る。

十一月、駙馬都尉梅殷をして淮安を鎮守せしむ。殷は太祖の女の寧國公主に尙す。太祖の崩せんとするや、其の側に侍して顧命を受けたる者は、實に帝と殷となり。太祖顧みて殷に語りたまはく、汝老成忠信、幼主を託すべしと。誓書および遺詔を出して授けたまひ、敢て天に違ふ者あらば、朕が爲に之を伐て、と言ひ訖りて崩れたまへるなり。燕の勢漸く大なるに及びて、諸將

觀望するもの多し。乃ち淮南の民を募り、軍士を合して四十萬と號し、殷に命じて之を統べて、淮上に駐まり、燕師を扼せしむ。燕王これを聞き、殷に書を遣り、香を金陵に進むるを以て辭と爲す。殷答へて曰く、進香は皇考禁あり、遵ふ者は孝たり、遵はざる者は不孝たりとて、使者の耳鼻を割き、峻嚴の語をもて斥く。燕王怒ること甚し。

燕王兵を起してより既に三年、戰勝つと雖も、得るところは永平・大寧・保定にして、南軍出沒して已まず、得るもまた棄つるに至ること多く、死傷少からず。燕王こゝに於て太息して曰く、頻年兵を用ひ、何の時か已む可けん、まさに江に臨みて一決し、復返顧せざらんと。時に京師の内臣等、帝の嚴なるを怨みて、燕王を戴くに意ある者あり。燕に告ぐるに金陵の空虚を以てし、閒に乗じて疾進すべしと勸む。燕王遂に意を決して十二月に至りて北平を出づ。

四年正月、燕の先鋒李遠、德州の裨將葛進を滹沱河に破り、朱能もまた平安の將賈榮等を衡水に破りて之を擒にす。燕王乃ち館陶より渡りて、東阿を攻め、汶上を攻め、沛縣を攻めて之を略し、遂に徐州に進み、城兵を威して取て出でざらしめて南行し、三月宿州に至り、平安が馬歩兵四萬を率ゐて追躡せるを澠河に破り、平安の麾下の番將火耳灰を得たり。此戰や火耳灰稍を執つて燕王に逼る。相距るたゞ十歩ばかり、童信射つて、其馬に中つ。馬倒れて王免れ、火耳灰

獲らる。王即便火耳灰を釋し、當夜入つて宿衛せしむ。諸將これを危みて言へども、王聽かず。

次いで蕭縣を略し、淮河の守兵を破る。四月平安小河に營し、燕兵河北に據る。總兵何福奮撃して、燕將陳文を斬り、平安勇戰して燕將王眞を圍む。眞身に十餘創を被り、自ら馬上に勿ぬ。安いよく逼りて、燕王に北坂に逼る。安の槊ほとんど王に及ぶ。燕の番騎指揮王騏、馬を躍らせ

て突入し、王わづかに脱するを得たり。燕將張武惡戰して敵を卻くと雖も、燕軍遂に克たず、是に於て南軍は橋南に駐まり、北軍は橋北に駐まり、相持するもの數日、南軍糧盡きて、燕を採つて食ふ。燕王曰く、南軍飢ゑたり、更に一二日にして糧や集まらば破り易からずと。乃ち兵千餘を留めて橋を守らしめ、潛に軍を移し、夜半に兵を渡らしめて繞つて敵の後に

出づ。時に徐輝祖の軍至る。甲戌大に齊眉山に戰ふ。午より酉に至りて、勝敗相當り、燕の驍將李斌死す。燕復遂に克つ能はず。南軍再捷して振ひ、燕は陳文、王眞、韓貴、李斌等を失ひ、諸將皆懼れ燕王に説いて曰く、軍深く入りたり、暑雨連綿として、淮土溼蒸に、疾疫漸く冒さんとす。小河の東は、平野にして牛羊多く、二麥まさに熟せんとす、河を渡り地を擇み土馬を休息せしめ、隙を觀て動くべきなりと。燕王曰く、兵の事は進ありて退無し。勝形成りて而して復北に渡らば、將士解體せざらんや、公等の見る所は、拘繫するのみと。乃ち令を下して曰く、北せんとする者は左

せよ、北せざらんとする者は右せよと。諸將多く左に趨る。王大に怒つて曰く、公等みづから之を爲せと。此時や燕の軍の勢、實に岌々乎として將に崩れんとするの危に居れり。孤軍長驅して深く敵地に入り、腹背左右、皆我が友たらざる也。北平は遠遠にして、而も本據の四圍亦皆敵たる也。燕の軍戦つて克てば即ち可、克たずんば自ら支ふる無き也。而して當面の敵たる何福は兵多くして力戦し、徐輝祖は堅實にして隙無く、平安は驍勇にして奇を出す。我軍は再戦して再挫し、猛將多く亡びて、眾心疑懼す。戦はんと欲すれば力足らず、歸らんとすれば前功盡く廢りて、不振の形勢新に見はれんとす。將卒を強ひて戦はしめんとすれば人心の乖離、不測の變を生ずる無きを保せず。諸將争つて左するを見て王の怒るも亦宜なりといふべし。然れども此時の勢、たゞ退かざるあるのみ、燕王の眾意を容れずして、敢然として奮戦せんと欲するもの、機を見る明確、事を斷ずる勇決、實に是れ豪傑の氣象、鐵石の心腸を見はせるものならずして何ぞや。時に座に朱能あり、能は張玉と共に初より王の左右の手たり。諸將の中に於て年最も少しと雖も、善戰有功、もとより人の敬服するところとなれるもの。身の長八尺、年三十五、雄毅開豁、孝友敦厚の人たり。慨然として席を立ち、劍を按じて右に趨きて曰く、諸君乞ふらくは勉めよ、昔漢高は十たび戦つて九たび敗れぬれど終に天下を有したり。今事を擧げてより速に勝を得たる

に、小挫して輒ち歸らば、更に能く北面して人に事へんや。諸君雄豪誠實、豈退心あるべけんや、と云ひければ、諸將相見て敢て言ふものあらず、全軍の心機一轉して、生死共に王に従はんとぞ決しける。朱能後に龍州に死して、東平王に追封せらるゝに至りしもの、豈偶然ならんや。

燕軍の勢非にして、王の甲を解かざるもの數日なりと雖も、將士の心は一にして兵氣は善變せるに反し、南軍は再捷すと雖も、兵氣は惡變せり。天意とや云はん。時運とや云はん。燕軍の再敗せること京師に聞えければ、廷臣の中に燕今は且に北に還るべし、京師空虚なり、良將無かるべからず。と曰ふ者ありて、朝議徐輝祖を召還したまふ。輝祖已むを得ずして京に歸りければ、何福の軍の勢殺けて、單絲の強少く、孤掌の鳴り難き狀を現はしぬ。加ふるに南軍は北軍の騎兵の馳突に備ふる爲に氈濠を掘り、壘壁を作りて營と爲すを常としければ、軍兵休息の暇少く、往々虚しく人力を耗すの憾ありて、士卒困罷退屈の情あり、燕王の軍は氈壘を爲らず、ただ隊伍を分布し、陣を列して門と爲す。故に將士は營に至れば、即ち休息するを得、暇あれば王射獵して地勢を周覽し、禽を得れば將士に頒ち、壘を抜くことに悉く獲るところの財物を賣ふ。南軍と北軍と、軍情おのづから異なることは是の如し、一は人役に就くを苦み、一は人用を爲すを樂む。彼此の差、勝敗に影響せずんばあらず。

かくて對壘日を累ぬる中、南軍に糧餉大に至るの報あり。燕王悦んで曰く、敵必ず兵を分ちて之を護らん、其の兵分れて勢弱きに乘じなば、如何で能く支へんや、と朱榮、劉江等を遣りて、輕騎を率ゐて、餉道を截らしめ、又游騎をして樵採を妨げ擾さしむ。何福乃ち營を靈壁に移す。南軍の糧五萬、平安馬歩六萬を帥ゐて之を護り、糧を負ふものをして中に居らしむ。燕王壯士萬人を分ちて敵の援兵を遮らしめ、于高煦をして兵を林間伏せ、敵戦ひて疲れば出でて撃つべしと命じ、みづから師を率ゐて逆へ戦ひ騎兵を兩翼と爲す。平安軍を引いて突至し、燕兵千餘を殺し、王歩軍を磨いて縦撃し、其陣を横貫し、斷つて二となし、かば、南軍遂に亂れたり。何福等此を見て安と合撃し、燕兵數千を殺して之を卻けしが、高煦は南軍の罷れたるを見、林間より突出し、新銳の勢をもて打撃を加へ、王は兵を還して掩ひ撃ちたり。是に於て南軍大に敗れ、殺傷萬餘人、馬三千餘匹を喪ひ、糧餉盡く燕の師に獲らる。福等は餘眾を率ゐて營に入り、壘門を塞ぎて堅守しけるが、福此夜令を下して、明旦砲聲三たびするを聞かば、圍を突いて出で、糧に淮河に就くべし、と示したり。然るに此も亦天か命か、其翌日燕軍靈壁の營を攻むるに當つて、燕兵偶然三たび砲を放つたり。南軍誤つて此を我砲となし争つて急に門に趨きしが、元より我が號砲ならざれば、門は塞がれたり。前者は出づることを得ず、後者は急に出でん

とす。營中紛擾し、人馬滾轉す。燕兵急に之を撃つて、遂に營を破り衝撃と包圍と共に敏捷を極む。南軍こゝに至つて大敗收む可からず。宗垣、陳性善、彭與明は死し、何福は逃れ走り、陳暉、平安、馬溥、徐眞、孫晟、王貴等、皆執へらる。平安の俘となるや、燕の軍中歡呼して地を動かす。曰く、吾等此より安きを獲んと。争つて安を殺さんことを請ふ。安が數々燕兵を破り、驍將を斬る數人なりしを以てなり。燕王其の材勇を惜みて許さず、安に問ひて曰く、灤河の戰、公の馬蹟かざんば、如何に我を遇せしぞと。安の曰く、殿下を刺すこと、朽を拉ぐが如くならんのみと。王太息して曰く、高皇帝、好く壯士を養ひたまへりと。勇卒を選みて、安を北平に送り、世子をして善く之を視せしむ。安後永樂七年に至りて自殺す。安等を喪ひてより、南軍大に衰ふ。黃子澄、靈壁の敗を聞き、胸を撫して大慟して曰く、大事去る。吾輩萬死、國を誤るの罪を贖ふに足らずと。

五月、燕兵泗州に至る。守將周景初降る。燕の師進んで淮に至る。盛庸防ぐ能はず、戰艦皆燕の獲るところとなり、盱眙陥れらる。燕王諸將の策を排して、直に揚州に趨く。揚州の守將王禮と弟宗と、監察御史王彬を縛して門を開いて降る。高郵、通泰、儀眞の諸城、亦皆降り、北軍の艦船江上に往來し、旗鼓天を蔽ふに至る。朝廷大臣、自ら全うするの計を爲して、復立つ

て争はんとする者無し。方孝孺、地を割きて燕に與へ、敵の師を緩らして、東南の募兵の至るを俟たんとす。乃ち慶城郡主を遣りて和を讓せしむ。郡主は燕王の従姉なり。燕王聽かずして曰く、皇考の分ちたまへる吾地も且つ保つ能はざらんとせり、何ぞ更に地を割くを望まん。たゞ奸臣を得るの後、孝陵に謁せんと。六月、燕師浦子口に至る。盛庸等之を破る。帝都督僉事陳瑄を遣りて舟師を率ゐて庸を援けしむるに、瑄卻つて燕に降り、舟を具へて迎ふ。燕王乃ち江神を祭り、師を誓はしめて江を渡る。舳艫相銜みて、金鼓大に震ふ。盛庸等海舟に兵を列せるも、皆大に驚き愕く。燕王諸將を麾き、鼓譟して先登す。庸の師潰え、海舟皆其の得るところとなる。鎮江の守將童俊、爲す能はざるを覺りて燕に降る。帝、江上の海舟も敵の用を爲し、鎮江等諸城皆降るを聞きて、憂鬱して計を方孝孺に問ふ。孝孺民を驅りて城に入れ、諸王をして門を守らしむ。李景隆等燕王に見えて割地の事を説くも、王應せず。勢いよく逼る。羣臣或は帝に勸むるに浙に幸するを以てするあり、或は湖湘に幸するに若かずとするあり。方孝孺堅く京を守りて勤王の師の來り援くるを待ち、事若し急ならば、車駕蜀に幸して、後學を爲さんことを請ふ。時に齊泰は廣徳に奔り、黃子澄は蘇州に奔り、徵兵を促す。蓋し二人皆實務の才にあらず、兵を得る無し。子澄は海に航して兵を外洋に徵さんとして果さず。燕將劉保、華聚等終に朝陽門に至り、

備無きを覘ひて還りて報ず。燕王大に喜び、兵を整へて進む。金川門に至る。谷王穗と李景隆と、金川門を守る。燕兵至るに及んで、遂に門を開いて降る。魏國公徐輝祖屈せず、師を率ゐて迎へ戦ふ。克つ能はず。朝廷文武皆俱に降つて燕王を迎ふ。

史を按じて兵馬の事を記す、筆墨も亦倦みたり。燕王事を擧げてより四年、遂に其志を得たり。天意か、人望か、數か、勢か、將又理の應に然るべきものあるか。鄒公瑾等十八人、殿前に於て李景隆を毆つて幾ど死せしむるに至りしも、亦益無きのみ、帝、金川門の守を失ひしを知りて、天を仰いで長吁し、東西に走り迷ひて、自殺せんとしたまふ。明史、恭閔惠皇帝紀に記す。宮中火起り、帝終る所を知らずと。皇后馬民は火に赴いて死したまふ。丙寅、諸王及び文武の臣、燕王に位に即かんことを請ふ。燕王辭すること再三、諸王羣臣、頓首して固く請ふ。王遂に奉天殿に詣りて、皇帝の位に即く。

最より先建文中、道士ありて、途に歌つて曰く。
 燕を逐ふ莫れ。
 燕を逐ふ莫れ。
 燕を逐ふ莫れ。

燕を逐へば、日に高く飛び、高く飛びて、帝畿に上らん。是に至りて人其言の應を知りぬ。燕王今は帝たり、宮人内侍を詰りて、建文帝の所在を問ひたまふに、皆馬皇后の死したまへるところを指して應ふ。乃ち屍を煨燼中より出して、之を哭し、翰林侍讀王景を召して、葬禮まさに如何すべき、と問ひたまふ。景對へて曰く、天子の禮を以てしたまふべしと。之に従ふ。

建文帝の皇考興宗孝康皇帝の廟號を去り、舊の諡に仍りて、懿文皇太子と號し、建文帝の弟吳王允熲を降して廣澤王とし、衛王允禧を懷恩王となし、除王允熙を敷惠王となし、尋で復庶人と爲し、諸王後皆其死を得ず。建文帝の少子は中都廣安宮に幽せられしが、後終るところを知らず。

魏國公徐輝祖、獄に下されれど屈せず、諸武臣皆歸附すれども、輝祖始終帝を戴くの意無し。帝大いに怒れども、元勳國舅たるを以て誅する能はず、爵を削つて之を私第に幽するのみ。輝祖は開國の大功臣たる中山王徐達の子にして、雄毅誠實、父達の風骨あり。齊眉山の戰、大に燕兵を破り、前後數戰、毎に良將の名を辱めず。其姊は即ち燕王の妃にして、其弟増壽は京師に

在りて常に燕の爲に國情を輸せるも、輝祖獨り毅然として正しきに據る。端嚴の性格、敬虔の行爲、良將とのみ云はんや、有道の君子といふべきなり。

兵部尙書鐵鉉、執へられて京に至る。廷中に背立して、帝に對はず、正言して屈せず、遂に寸裂せらる。死に至りて猶罵るを以て、大鑊に油煎せらるゝに至る。參軍斷事高巍かつて曰く、忠に死し孝に死するは、臣の願なりと、京城破れて、驛舎に縊死す。禮部尙書陳迪、刑部尙書暴昭、禮部侍郎黃觀、蘇州知府姚善、翰林修譚王叔英、翰林王良、浙江按察使王良、兵部郎中譚冀、御史曾鳳韶、谷府長史劉璟、其他數十人、或は屈せずして殺され、或は自死して義を全くす。齊泰、黃子澄、皆執へられ、屈せずして死す。右副都御史練子寧、縛せられて闕に至る。語不遜なり。帝大に怒つて、命じて其舌を斷らしめ、曰く、吾周公の成王を輔くるに倣はんと欲するのみと。子寧手をもて舌血を探り、地上に、成王安在の四字を大書す。帝益々怒りて之を磔殺し、宗族棄市せらるゝ者、一百五十一人なり。左僉都御史景清、詭りて歸附し恆に利劍を衣中に伏せて、帝に報いんとす。八月望日、清緋衣して入る。是より先に靈臺奏す、文曲星帝座を犯す急にして色赤しと。是に於て清の獨り緋を衣るを見て之を疑ふ。朝畢る。清奮躍して駕を犯さんとす。帝左右に命じて之を收めしむ。劍を得たり。清志の遂ぐべからざるを知り、植立して大に罵る。

眾其齒を抉す。且抉せられて且罵り、血を含んで直に御袍に嘔く、乃ち命じて其皮を剝ぎ、長安門に繋ぎ、骨肉を碎糜す。清帝の夢に入つて劍を執つて追ひて御座を繞る。帝覺めて、清の族を赤し郷を籍し、村里も墟となるに至る。

戸部侍郎卓敬執へらる。帝曰く、爾前日諸王を裁抑す、今復我に臣たらざらんかと。敬曰く、先帝若し敬が言に依りたまはば、殿下豈此に至るを得たまはんやと。帝怒りて之を殺さんと欲す。而も其才を憐みて獄に繋ぎ、諷するに管仲・魏徴の事を以てす。帝の意、敬を用ゐんとする也。敬たゞ涕泣して可かず。帝猶殺すに忍びず。道衍白す。虎を養ふは息を遺すのみと。帝の意遂に決す。敬刑せらるゝに臨みて、從容として歎じて曰く、變宗親に起り略、經畫無し、敬死して餘罪ありと。神色自若たり。死して經宿して、面猶生けるが如し。三族を誅し、其家を殺すに、家たゞ圖書數卷のみ。卓敬と道衍と、故より隙ありしと雖も、帝をして方孝孺を殺さざらしめんとしたりし道衍にして、帝をして敬を殺さしめんとす。敬の實用の才ありて浮文の人にあらざるを見るべし。建文の初に當りて、燕を憂ふるの諸臣、各意見を立て奏疏を上る。中に就て敬の言最も實に切なり。敬の言にして用ゐらるれば、燕王蓋し志を得ざるのみ。萬曆に至りて、御史屠叔方奏して敬の墓を表し祠を立つ。敬の著すところ、卓氏遺書五十卷、予未だ目を寓せずと雖

も、管仲・魏徴の事を以て諷せられしの人、其の書必ず観る可きあらん。

卓敬を容るゝ能はざりしも、方孝孺を殺す勿れと云ひし道衍は如何の人ぞや。眇たる一山僧の身を以て、燕王を勸めて篡奪を取てせしめ、定策決機、皆みづから當り、臣天命を知る何ぞ民意を問はん、といふの豪傑を以て、天下を鼓動し癡蠻し、億兆を鳥飛し獸奔せしめて憚らず、功成つて少師と呼ばれて名いはれざるに及んで、而も蓄髮を命ぜらるれども肯んぜず、邸第を賜ひ、宮人を賜はれども、辭して皆受けず、冠帯して朝すれども、退けば即ち緇衣、香煙茶味、淡然として生を終り、榮國公を贈られ、葬を賜はり、天子をして親づから神道碑を製するに至らしむ。又一箇の異人といふべし。魔王の如く、道人の如く、策士の如く、詩客の如く、實に袁珙の所謂異僧なり。其の詠ずるところの雜詩の一に曰く、

志士は 苦節を守る、
達人は 玄言に滞らんや。
苦節は 貞くす可からず、
玄言 豈其れ然らんや。

出ると處ると 固より定り有り、
語るも黙するも 縁無きにあらず。

伯夷 量 何ぞ隘き、

宣尼 智 何ぞ圓なる。

所以に 古の君子、

命に安んずるを 乃ち賢と爲す。

苦節は貞くす可からずの一句、易の爻辭の節の上六に、苦節、貞くすれば凶なり、とあるに本
づくとも、口氣おのづからは道衍の一家言なり。況んや易の貞凶の貞は、貞固の貞にあらずし
て、貞悔の貞とするの説無きにあらざるをや。伯夷量何ぞ隘きといふに至つては、古賢の言に據
ると雖も、聖の清なる者に對して、忌憚無きも亦甚しといふべし。その擬古の詩の一に曰く、

良辰 遇ひ難きを念ひて、

筵を開き 綺戸に當る。

會す 我が 同門の友、

言笑 一に何ぞ靡ある。

素絃 清商を發し、

餘響 樽俎を繞る。

綏舞 吳姬 出で、

輕謳 越女 來る。

但欲ふ 客の酬醉せんことを、

觥 籌 何ぞ背て數へむ。

流年 森 馳を歎く、

力有るも誰か得て阻めむ。

人生 須らく歡樂すべし、

長に辛苦せしむる勿れ。

擬古の詩もとより、直に抒情の作とす可からずと雖も、此是れ緇を被て香を焚く佛門の人の吟
ならんや。其の北固山を経て、賦せる懷古の詩といふもの、今存するの詩集に見えずと雖も、僧
宗泐一讀して、此豈釋子の語ならんやと、曰ひしといふ。北固山は宋の韓世忠兵を伏せて、大に
金の兀朮を破るの處たり。其詩また想ふ可き也。劉文貞公の墓を詠するの詩は、直に自己の胸臆

を據ぶ。文貞は即ち秉忠にして、袁玳の評せしが如く、道衍の燕に於けるは、秉忠の元に於けるが如く、其の初の僧たる、其の世に立つて功を成せる、皆相肖たり。蓋し道衍の秉忠に於けるは、岳飛が關張と比しからんとし、諸葛亮が管・樂に擬したるが如く、思慕して而して倣模せるところありしなるべし。詩に曰く、

良驥 色 羣に同じく、

至人 迹 俗に混ず。

知己 苟も遇はざれば、一

終世 怨み讒まず。

偉なる哉 藏春公や、

簞瓢 巖谷に樂む。

一朝 風雲 會す、

君臣 おのづから心腹なり。」

大業 計 已に成りて、

勳名 簡牘に照る。

身退いて 即ち長往し、

川流れて 去つて復ること無し。

住城 百年の後、

鬱々たり 盧溝の北。

松楸 煙靄 青く、

翁 仲 薜蘿 緑なり。

強梁も 敢て犯さず、

何人か 敢て 樵牧せん。

王侯の 墓累々たるも、

廢すること 草宿をも待たず。

惟公 民望に在り、

天地と傾覆を同じうす。

斯人 作す可からず、

再拜して 還一哭す。

藏春は秉忠の號なり。盧溝は燕の城南に在り。此詩劉文貞に傾倒すること甚だ明らか、其の高風大業を擧げ、而して再拜一哭といふに至る。性情行經相近し、徘徊感慨、まことに止む能はざるものありしならん。又別に、春日劉太保の墓に調するの七律あり。まことに思慕の切なるを證すといふべし。東游せんとして郷中諸友に別るゝの長詩に、

我生れて 四方の志あり、
樂まず 郷井の中を。

茫乎たる 宇宙の内、
飄轉して 秋蓬の如し。

孰か云ふ 扶む所無しと、
耿々たるもの 吾胸に存す。

魚の鰯に止まるを爲すに忍びんや、
禽の籠に囚はるゝを作すを肯せんや。

三たび登ると 九たび到ると、
古徳と與に同じうせんと欲す。

去年は 淮楚に客たりき、
今は往かんとす 浙水の東。
身を竦てて 雲欄に入る、
一 錫 游龍の如し。
笠は衝く 罪々の霧、
衣は拂ふ 塵々の風。
の句あり。身を竦てての句、颯爽悦ぶ可し。其末に、

江天 正に秋清く、
山水 亦容を改む。

沙鳥は 煙の際に白く、
楓葉は 霜の前に紅なり。

といへる如き、常套の語なれども、また愛す可し。古徳と同じうせんと欲するは、是れ假にして、淮楚浙東に往來せるも、修行の爲なりしや游覽の爲なりしや知る可からず。然れども、詩情も亦饒き人たりしは疑ふ可からず。詩に於ては陶淵明を推し、笠澤の舟中に陶詩を讀むの作あり、中

に淵明を學べる者を評して、

應物は趣頗合し、

子瞻は才當るに足る。

と韋、蘇の二士を擧げ、其他の模倣者を、

里婦西が顰に效ふ、

咲ふ可し醜愈張る。

と冷笑す。又公暇に王維、孟浩然、韋應物、柳子厚の詩を讀みて、四子を贊する詩を爲せる如き、

其の好む所の主とするところありて泛濫ならざるを示せり。當時の詩人に於ては、高啓を重んじ、

交情また親しきものありしは、奉答高季迪、寄高編修、賀高啓生子、訪高啓鍾山寓舍二辱、

詩見貽、雪夜讀高啓詩、等の詩に徴して知るべく、此老の詩眼暗からざるを見る。逃虚集十卷、

續集一卷、詩精妙といふにあらざると雖も、時に逸氣あり。今其集に就て交友を考ふるに、袁珙と

張天師とは、最も親熟する處なるが如く、贈遺の什甚だ少からず。珙と道衍とは本より互に知己

たり。道衍又嘗て道士席應眞を師として陰陽術數の學を受く。因つて道家の旨を知り、仙趣の微

に通ず。詩集卷七に、挽席道士とあるもの、疑ふらくは應眞、若くは應眞の族を悼めるならむ。

張天師は道家の棟梁たり。道衍の張を重んぜるも怪むに足る無きなり。故友に於ては最も王達善を親む。故に其の寄王助教達善の長詩の前半、自己の感慨行藏を敘して忌まず、道衍自傳として看る可し。詩に曰く、

乾坤果して何物ぞ、

開闢古より有り。

世を擧つて孰か客に非ざらん、

離會豈偶なりと云はんや。」

嗟予蓬蒿の人、

鄙猥林藪に匿る。

自ら慚つ驚蹇の姿、

寧ぞ學はん牛馬の走るを。

吳山竊くして而して深し、

性を養ひて老朽を甘んず。」

且木石と共に居りて、

氷燦と 志 堅く守りぬ。
 人は云ふ 鳳 枳に栖むと、
 豈同じからんや 魚の那に在るに。
 藜藿 我腸を充し、
 衣敝れて 兩肘露はる。
 夔龍 高位に在り、
 誰か來りて 可否を問はん。
 盤旋す 草莽の間に、
 樵牧 日に相叩く。
 嘯詠 寒山に擬し、
 惟 道を以て自負す。
 忍びざりき 強ひて塗抹して、
 乞媚びて 里婦に效ふに。
 山靈 藏るゝことを容さず、

辟歴 岡阜を破りぬ。
 門を出でて 天日を睹る、
 行也 焉にぞ 肯て苟もせん。
 一擧して 即ち北に上れば、
 親藩 待つこと惟久しかりき。
 天地 忽ち 大變して、
 神龍 氷湫より起る。
 萬方 共に忻び躍りて、
 率土 元后を戴く。
 吾を召して、南京に來らしめ、
 爵賞 加恩 厚し。
 常時 天眷を荷ふ、
 愛に因つて、醜を知らず。(下略)

嘯詠寒山に擬するの句は、此老の行爲に照せば矯飾の言に近きを覺ゆれども、若夫れ知己に遇

はずんば、強項の人、或は吳山に老朽を甘んじて、一生世外の衲子たりしも、また知るべからず、未だ遽に虚高の辭を爲すものと斷ず可からず。たゞ道衍の性の豪雄なる、嘯詠吟哦、或は獅子の繡毬を弄して日を消するが如くに、其身を終ることは之有るべし、寒山子の如くに、蕭散閑曠、塵表に逍遙して、其身を遺るゝを得可きや否や、疑ふ可き也。夔龍高位に在りは建文帝をいふ。山靈藏するを容さず以下數句、燕王に召出されしをいふ。神龍氷湫より起るの句は燕王崛起の事をいふ。道ひ得て佳なり。愛に因つて醜を知らずの句は、知己の恩に感じて吾身を世に徇ふるを言へるもの、亦善く標置すといふべし。

道衍の一生を考ふるに、其の燕を幫けて篡を成さしめし所以のもの、榮名厚利の爲にあらざるが如し。而も名利の爲にせずんば、何を苦んでか、紅血を民人に流さしめて、白帽を藩王に戴かしめしぞ。道衍と建文帝と、深仇宿怨あるにあらず。道衍と、燕王と大恩至交あるにあらず。實に解す可からざるある也。道衍己の偉功によつて以て佛道の爲にすと云はんか、佛道明朝の爲に壓迫せらるゝありしに非る也。燕王覬覦の情無き能はざりしと雖も、道衍の扇を鼓して火を煽るにあらざれば、燕王未だ必ずしも毒煙猛餓を揚げざるなり。道衍抑又何の求むるあつて、燕王

をして決然として立たしめしや。王の事を擧ぐるの時、道衍の年や既に六十四五、呂尙・范增皆老いて、而して後立つと雖も、圓頂黑衣の人を以て、諸行無常の教を奉じ、而して落日暮雲の時に際し、逆天非理の兵を起さしむ。嗚呼又解すべからずといふべし。若し強ひて道衍の爲に解さば、惟是れ道衍が天に稟くるの氣と、自ら負むの材と、莽々、蕩々、糾々、昂々として、屈す可からず、撓む可からず。消す可からず、抑ふ可からざる者、燕王に遇ふに當つて、冥然として破裂し、爆然として迸發せるものといふべき耶。非耶。予其の逃虚子集を讀むに、道衍が英雄豪傑の蹟に感慨するもの多くして、佛燈梵鐘の間に幽潛するの情の少きを思はずんばあらざるなり。道衍の人となりの古怪なる、實に一沙門を以て目す可からずと雖も、而も文を好み道の爲にするの情も、亦偽なりとなす可からず。此故に太祖實録を重修するや、衍實に其監修を爲し、又支那ありてより以來の大編纂たる永樂大典の成れるも、衍實に解縉等と與に之を爲せるにて、是れ皆文を好むの餘に出で、道餘録を著し、淨土簡要録を著し、諸上善人詠を著せるは、是れ皆道の爲にせるに出づ。史に記す。道衍晩に道餘録を著し、頗る先儒を毀る。識者これを鄙しむ。其の故郷の長州に至るや、同産の姉を候す、姉納れず。其友王賓を訪ふ、賓も亦見えず、但遙に語つて曰く、和尙誤れり、和尙誤れりと。復往いて姉を見る、姉これを罵る。道衍惘然たりと。道衍

の姉、儒を奉じ佛を斥くるか、何ぞ婦女の見識に似ざるや。王資は史に傳無しと雖も、おもふに道衍が詩を寄せしところの王達善ならむか。聲を揚げて遙語す。鄙しむも亦甚し。今道餘録を讀むに、姉と友との道衍を薄んじて之を惡むも、亦過ぎたりといふべし。道餘録自序に曰く、余曩に僧たりし時、元季の兵亂に値ふ。年三十に近くして、愚庵の及和尚に徑山に従つて禪學を習ふ。暇あれば内外の典籍を披閱して以て才識に資す。因つて河南の二程先生の遺書と新安の晦庵朱先生の語録を觀る。(中略)三先生既に斯文の宗主、後學の師範たり、佛老を攘斥すといふと雖も、必ず當に理に據つて至公無私なるべし、即ち人心服せん。三先生多く佛書を探らざるに因つて佛の底蘊を知らず、一に私意を以て邪說の隙を出して、枉抑太だ過ぎたり、世の人も心亦多く平らかならず、況んや其學を宗とする者をやと。(下略)道餘録は乃ち程氏遺書の中の佛道を論ずるもの二十八條、朱子語録の中の同二十一條を目して、極めて謬誕なりと爲し、條を逐ひ理に據つて一々剖析せるものなり。藁成つて巾笥に藏すること年ありて後、永樂十年十一月、自序を附して公刊す。今これを讀むに、大抵禪子の常談にして、別に他の奇無し。蓋し明道、伊川、晦庵の佛を排する、皆雄論博議あるにあらず、卒然の言、偶發の語多し、而して廣く佛典を讀まざるも、亦其の免れざるところなり。故に佛を奉ずる者の、三先生に應酬するが如き、本是辨じ易き

の事たり。膽を張り目を怒らし、手を戟にし氣を壯にするを要せず。道衍の峻機險鋒を以て、徐に幾百年前の故紙に對す、縱說橫說、甚だ是れ容易なり。是れ其の觀る可き無き所以なり。而して道衍の筆舌の銳利なる、明道の言を屬つて、豈道學の君子の爲ならんやと云ひ、明道の執見僻說、委巷の曲士の若し、誠に咲ふ可き也、と云ひ、明道何ぞ乃ち自ら苦むこと此の如くなるや、と云ひ、伊川の言を評しては、此は是れ伊川みづから此說を造つて禪學者を誣ふ、伊川が良心いづくにか在る、と云ひ、管を以て天を窺ふが如しとは夫子みづから道ふなりと云ひ、程夫子彌強自任す、聖人の道を傳ふる者、是の如くなる可からざる也、と云ひ、晦庵の言を難しては、朱子の讒語と云ひ、惟私意を逞しくして以て佛を誣る、と云ひ、朱子も亦怪なり、と云ひ、晦庵此の如くに心を用るば、市井の閑の小人の争ひて販賣する者の所爲と何を以てか異ならんや、と云ひ、先賢大儒、世の尊信崇敬するところの者を愚弄嘲笑すること太だ過ぎ、其の口氣甚だ憎む可し。是れ蓋し其姉の納れず、其友の見ざるに至れる所以ならずんばあらず。道衍の言を考ふるに、大槩禪宗に依り、楞伽、楞嚴、圓覺、法華、華嚴等の經に據つて、程朱の排佛の説の非理無實なるを論ずるに過ぎず。然れども程朱の學、一世の士君子の奉ずるところたるの日に於て、抗爭反擊の辯を逞しくす。書の公にさるゝの時、道衍既に七十八歳、道の爲にすと曰ふと雖も、亦爭

を好むといふべし。此も亦道衍が莽々蕩々の氣の、已む能はずして然るもの耶、非耶。
道衍は是の如きの人なり、而して猶卓侍郎を容るゝ能はず、之を赦さんとするの帝をして之を
殺さしむるに至る。素より相善からざるの私ありしに因るとは云へ、又實に卓の才の大にして
器の偉なるを忌みたるにあらずんばならず。道衍の忌むところとなる、卓惟恭もまた雄傑の士と
いふべし。

道衍の卓敬に對する、衍の詩句を假りて之を評すれば、道衍量何ぞ隘きやと云ふ可きなり。然
るに道衍の方正學に對するは則ち大に異なり。方正學の燕王に於けるは、實に相容れざるもの
あり。燕王の師を興すや、君側の小人を掃はんとするを名として、其の目して以て事を構へ親を破
り、天下を誤るとなせる者は、齊黃練方の四人なりき。齊は齊泰なり、黃は黃子澄なり、練は練
子寧なり、而して方は即ち方正學なり。燕王にして功の成るや、もりより此四人を得て甘心せん
とす。道衍は王の心腹なり、初よりこれを知らざるにあらず。然るに燕王の北平を發するに當り、
道衍これを宛に送り、跪いて密に啓して曰く、臣願はくは託する所有らんと。王何ぞと問ふ。衍
曰く、南に方孝孺あり、學行あるを以て聞ゆ、王の旗城下に進むの日、彼必ず降らざらんも、幸
に之を殺したまふ勿れ、之を殺したまはゞ則ち天下の讀書の種子絶えんと。燕王これを首肯す。

道衍の卓敬に於ける、私情の憎嫉ありて、方孝孺に於ける、私情の愛好あるか、何ぞ其の二者に
對するの厚薄あるや。孝孺は宋濂の門下の巨珠にして、道衍と宋濂とは蓋し文字の交あり。道衍
の少きや、學を好み詩を工にして、濂の推奨するところとなる。道衍豈孝孺が濂の愛重するこ
ろの弟子たるを以て深く知るところありて庇護するか。或は又孝孺の文章學術、一世の仰慕する
ところたるを以て、之を殺すは燕王の盛徳を傷り、天下の批議を惹く所以なるを慮りて憚るか、
將又眞に天下讀書の種子の絶えんことを懼るゝか、抑亦孝孺の嚴厲の操履、燕王の剛邁の氣象、
二者相遇はゞ、氷塊の鐵塊と相撃ち、鷲王と龍王との相闘ふが如き凄慘狼毒の光景を生せんこ
とを想察して、預め之を防遏せんとせるか、今皆確知する能はざるなり。

方孝孺は如何なる人ぞや、孝孺字は希直、一字は希古、寧海の人。父克勤は濟寧の知府たり。
治を爲すに徳を本とし、心を苦めて民の爲にす。田野を開き、學校を興し、勤儉身を持し、敦厚
人を待つ。かつて盛夏に當つて濟寧の守將、民を督して城を築かしむ。克勤曰く、民今耕耘暇あ
らず、何ぞ又奮鋤に堪へんと。中書省に請ひて役を罷むるを得たり。是より先き久しく旱せしが、
役を罷むに及んで甘雨大に至りしかば、濟寧の民歌つて曰く、
孰か我が役を罷めしめしぞ、

使君の力なり。
孰か我が黍を活かしめしぞ、
使君の雨なり。
使君よ 去りたまふ勿ふ、
我が民の父なり 母なり。

克勤の民意を得る是の如くなりしかば、事を視ること三年にして、戸口増倍し、一郡饒足し、男女怡々として生を樂みしといふ。克勤愚庵と號す。宋派に故愚庵先生方公墓銘文あり。滔々數千言、備に其の人となり盡す。中に記す。晩年益々畏懼を加へ、晝の爲す所の事、夜は則ち天に白すと。愚庵はたゞに循吏たるのみならざるなり。濂又曰く、古に謂はゆる體道成徳の人、先生誠に庶幾焉と。蓋し濂が誤墓の辭にあらず。孝孺は此の愚庵先生第二子として生れたり。天賦も厚く、庭訓も嚴なりしならむ。幼にして精緻、雙眸炯々として、日に書を讀むこと寸に盈ち、文を爲すに雄邁醇深なりしかば郷人呼んで小韓子となせりといふ。其の聰慧なりしこと知る可し。時に宋派一代の大儒として太祖の優待を受け、文章徳業、天下の仰望するところとなり、四方の學者、悉く稱して太史公となして、姓氏を以てせず。濂字は、景濂、其先金華の潛溪の人なるを

以て潛溪と號す。太祖濂を廷に譽めて曰く、宋景濂朕に事ふこと十九年、未だ嘗て一言の偽あらず。一人の短を誦らず、始終二無し、たゞに君子のみならず、抑々賢と謂ふ可しと。太祖の濂を視ることは是の如し。濂の人品想ふ可き也。孝孺洪武の九年を以て、濂に見えて弟子となる。濂時に年六十八、孝孺を得て大に之を喜ぶ。潛溪が方生の天台に還るを送るの詩の序に記して曰く、晩に天台の方生希直を得たり、其の人となりや凝重にして物に遷らず、穎銳にして以て諸を理に燭す。開發して文を爲す、水の湧いて山の出づるが如し。喧啾たる百鳥の中、此の孤鳳皇を見る、いかんぞ喜びざらんと。凝重穎銳の二句、老先生眼裏の好學生を寫し出し來つて神有り。此の孤鳳皇を見るといふに至つては、推重も亦至れり。詩十四章、其二に曰く、
念ふ 子が 初めて來たりし時、
才思 繭絲の若し。
之を抽いて 已に結を見る、
染めて就せ 五色の衣。
其九に曰く、
須らく知るべし 九仞の山も、

功 或は 一簣に少くるを。
學は 貴ぶ 日に随つて新なるを、
慎んで 中道に廢する勿れ。

其十に曰く、

羣經 明訓 耿たり、

白日 青天に麗る。

苟も 徒に 文辭に溺れなば、一

盤燭 妍を争はんと欲するなり。」

其十一に曰く、

姫も 孔も 亦何人ぞや、

顔面 了に異ならじ。

肯て 盆盎の中に墮せんや、一

當に 瑚璉の器となるべし。

其終章に曰く、

明年 二三月、

羅山 花 正に開かん。

高きに登りて 日に眺望し、

子が能く 重ねて來るを遲たむ。

其才を稱し、其學を勸め、其の流れて文辭の人とならんことを戒め、其の奮つて聖賢の域に至らんことを求め、他日復再び大道を論せんことを欲す。潛溪が孝孺に對する、稱許も甚だ至り、親切も深く徹するを見るに足るものあり。嗚呼、老先生、孰か好學生を愛せざらん。好學生、孰か老先生を慕はざらん。孝孺は其翌年丁巳、經を執つて浦陽に潛溪に就きぬ。從學四年、業大に進んで、潛溪門下の知名の英俊、皆其の下に出で、先輩胡翰も蘇伯衡も亦自ら如かずと謂ふに至り。洪武十三年の秋、孝孺が歸省するに及び、潛溪が之を送る五十四韻の長詩あり。其引の中に記して曰く、細らかに其の進修の功を占ふに、日々に異なるありて、月々に同じからず、僅に四春秋を越ゆるのみにして而して英發光著や斯の如し、後四春秋ならしめば、則ち、其の至るところ又如何なるを知らず、近代を以て之を言へば、歐陽少卿、蘇長公の輩は、姑らく置きて論ぜず、自餘の諸子、之と文藝の場に角逐せば、孰か後となり孰か先となるを知らざる也。今此説を

爲す、人必ず予の過情を疑はんも、後二十餘年にして當に其の知言にして、生を許す者の過に非ざるを信すべき也。然りと雖も予の生に許すところの者、寧ぞ獨り文のみならんやと。又曰く、予深く其の去るを惜み、爲に此詩を賦す、既に其の素有の善を揚げ、復賜むるに遠大の業を以てすと。潜溪の孝孺を愛重し獎勵すること、至れり盡せりといふべし。其詩や辭を行る自在にして、意を立つる莊重、孝孺に期するに大成を以てし、必ず經世濟民の眞儒とならんことを欲す。章末に句有り、曰く、

生は乃ち 周の容刀。

生は乃ち 魯の輿璠。

道眞なれば 器乃ち貴し

爰ぞ須るん 空言を用ゐるを。」

孳々として 務めて踐形し、

負く勿れ 七尺の身に。

敬義 以て衣と爲し、

忠信 以て冠と爲し、

慈仁 以て佩と爲し

廉知 以て鑿と爲し、

特り立つて 千古を脱まば、

萬象 明らかにして昏き無からむ。」

此意 竟に誰か知らん、

爾が爲に 言諒々たり。

徒に 強聒ふと謂ふ勿れ、

一一 宜しく紳に書すべし。

孝孺後に至りて此詩を録して人に視すの時、書して曰く、前輩後學を勉めしむ、愓々の意、特り文辭のみに在らず、望むらくは相與に之を勉めむと。臨海の林佑、葉見泰等、潜溪の詩に跋して、又各宋太史の期望に酬いんことを孝孺に求む、孝孺は果して潜溪に負かざりき。

孝孺の集は、其人天子の惡むところ、一世の諱むところとなりしを以て、當時絶滅に歸し、後六十年にして臨海の趙洪が梓に附せしより、復漸く世に傳はるを得たり。今遜志齋集を執つて

之を讀むに、蜀王が所謂正學先生の精神面目奕々として儼存するを覺ゆ。其の幼儀雜箴二十首を讀めば、坐・立・行・寢より、言・動・飲・食等に至る、皆道に違はざらんことを欲して、而して實踐躬行底より徳を成さんとするの意、看取すべし。其雜箴を讀めば、冠・帶・衣・履より、箠・鞍・轡・車等に至る、各物一々に湯の日新の銘に則りて、語を下し文を爲す。反省修養の意、看取すべし。雜箴三十八章、學箴九首、家人箴十五首、宗儀九首等を讀めば、希直の學を爲すや空言を排し、實踐を尊み、體驗心證して、而して聖賢の域に躋らんとするを看取すべし。明史に稱す、孝孺は文藝を末視し、恆に王道を明らかにし太平を致すを以て己が任と爲すと。(是鄭曉の方先生傳に本づく)眞に然り、孝孺の志すところの遠大にして、願ふところの眞摯なる、人を以て感奮せしむるものあり。雜箴の第四章に曰く、學術の微なるは、四箴之を害すればなり。茲言を文り、近事を撫り、時勢を窺伺し、便に趨り隙に投じ、富貴を以て志と爲す。此を利祿の靈と謂ふ。耳聒し口術し、色を詭り辭を淫にし、聖賢に非ずして、而も自立し、果敢大言して、以て人に高ぶり、而して理の是非を顧みず。是を名を務むるの靈といふ。鈎撫して説を成し、上古に合するを務め、先儒を毀譽し、以謂らく我に及ぶ莫き也と、更に異議を爲して、以て學者を惑はす。是を訓詁の靈といふ。道德の旨を知らず、雕飾綴緝して、以て新奇となし、齒を紺し舌

を刺して、以て簡古と爲し、世に於て加益するところ無し。是を文辭の靈といふ。四者交々作りて、聖人の學亡ぶ。必ずや諸を身に本づけ、諸を政教に見はし、以て物を成す可き者は、其れ惟聖人の學乎。聖道を去つて而して循はず、而して惟靈にこれ歸す。甚しい哉惑へるや、と。孝孺の此言に照せば、鄭曉の傳ふるところ、實に虚しからざる也。四箴の序の中の語に曰く、天に合して人に合せず、道に同じうして時に同じうせずと。孝孺の此言に照せば、既に其の卓然として自立し、信ずるところあり、安んずるところあり、潛溪先生が謂へる所の、特り立つて千古を睨み、萬象昭して昏き無し之境に入れるを看るべし。又其の克畏の箴を讀めば、あゝ皇いなる上帝、衷を人に降す、といへるより、其の方に昏きに當つてや、恬として宜しく然るべしと謂ふも、中夜靜かに思へば夫れ豈吾が天ならんや、迺ち奮つて而して悲み、忝かに前轍を改むと云ひ、一念の微なるも、鬼神降監す、安しとする所に安んずる勿れ、嗜む所を嗜む勿れ、といひ、表裏交修めて、本末一致せんといへる如き、恰も神を奉せる者の如き思想感情の漲流せるを見る。父克勤の、晝の爲せるところ、夜は則ち天に白したるに合せ考ふれば、孝孺が善良の父、方正の師、孔孟の正大純粹の教の徳光惠風に浸潤して、眞に心胸の深處よりして道を體し徳を成すの人たらんことを願へるの人たるを看るべき也。

孝孺既に文藝を未視し、孔孟の學を爲し、伊周の事に任ぜんとす。然れども其の文章亦おのづから佳、前人評して曰く、醇龐博朗、沛乎として餘有り、勃乎として禦く莫しと。又曰く、醇深雄邁と。其の一大文豪たる、世もとより定評あり、動かす可からざるなり。詩は蓋し其の心を用ゐるところにあらずと雖も、亦おのづから觀る可し。其の王仲紹感懷の韻に次する詩の末に句あり、曰く、

壯士 千載の心

豈憂へんや 食と衣とを。

由來 海に浮はんの志、

是れ 軒冕の姿にあらず。

人生 道を聞くを尙ぶ、

富貴 復奚爲るものぞ。

賢にして有り 陋巷の樂、

聖にして有り 西山の饑。

顔を染る 失ふところ多し、

苦節 未だ非とす可からず。

道衍は豪傑なり、孝孺は君子なり。逃虚子は歌つて曰く、苦節貞くすべからずと。遜志齋は歌つて曰く、苦節未だ非とす可からずと。逃虚子は吟じて曰く、伯夷量何ぞ隘きと。遜志齋は吟じて曰く、聖にして有り西山の饑と。孝孺又其の濬陽を過ぎるの詩の中の句に吟じて曰く、之に因つて首陽を念ふ。西顧すれば清風生ずと。又乙丑中秋後二日兄に寄する詩の句に曰く、苦節伯夷を慕ふと。人異なれば情異なり、情異なれば詩異なり。道衍は僧にして、觥籌又何ぞ數へんといひて、快樂主義者の如く、希直は俗にして、飲の箴に、酒の患たる、謹者をして荒み、莊者をして狂し、貴者をして賤しく、存者をして亡びしむ、といひ、酒卮の銘には、親を治くし衆を和するも、恆に斯に於てし、禍を造り敗をおこすも、恆に斯に於てす、其惡に懲り、以て善に趨り、其儀を慎むを尙ぶ、といへり。逃虚子は佛を奉じて、而も順世外道の如く、遜志齋は儒を尊んで、而も淨行者の如し。嗚呼、何ぞ其の奇なるや。然も遜志齋も飲を解せざるにあらず。其の上巳南樓に登るの詩に曰く、

昔時 喜んで酒を飲み、

白を 擧げて 深きを辭せざりき。

茲に中歳に及んでよりこのかた、
 已に復 人の謝むを畏る。
 後生 ゆるがせにする所多きも、
 豈識らんや 老の會臨するを。
 志士は 景光を惜む、
 麓に登れば 已に岑を知る。
 毎に聞く 前世の事、
 頗る見る 古人の心。
 逝く者 まことに息まず、一
 將來 誰か今に嗣がむ。
 百年 當に成る有るべし、
 浪滅 寧ぞ飲むに足らんや。
 毎に憐む 伯牙の陋にして、
 鍾 死して 其琴を破れるを。

自ら得るあらば 苟に傳ふるに堪へむ、

何ぞ必ずしも 知音を求めんや。

俯しては觀る 水中の餘、

仰いでは觀る 雲際の禽。

眞樂 吾 隠さず、

欣然として 煩襟を豁うす。

前半は卮酒、歡樂、學業の荒廢を致さんことを歎じ、後半は一轉して、眞樂の自得にありて外に待つ無きをいふ。伯牙を陋として破琴を憐み、莊子を引きて不隱を擧ぐ。それ外より入る者は、中に主たる無し、門より入る者は家珍にあらず。白を擧げて樂となす、何ぞ是れ至樂ならん。

遜志齋の詩を逃虛子の詩に比するに、風格おのづから異にして、精神實に殊なり。意氣の俊邁なるに至つては、互に相遜らずと雖も、正學先生の詩は竟に是れ正學先生の詩にして、其の歸趣を考ふるに、毎に正々堂々の大道に合せんことを欲し、絶えて鼓側詭譎の言を爲さず、放逸曠達の態無し。勉學の詩二十四章の如きは、蓋し壯時の作と雖も、其の本色なり。談詩五首の一に曰く。世を擧つて 皆宗とす 李杜の詩を、

知らず 李杜の 更に誰を宗とせるを。
能く 風雅 無窮の意を探らば、
始めて是れ 乾坤 絶妙の詞ならん。

第二に曰く、

道徳を 發揮して 乃ち文を成す、
枝葉 何ぞ曾て 本根を離れん。
末俗 工を競ふ 繁綺の體、
千秋の精意 誰と與に論ぜん。

是れ正學先生の詩に於けるの見なり。華を斥け實を尙び、雅を愛し淫を惡む。尋常一様詩詞の人の、綺麗自ら喜び、藻繪自ら衒ひ、而して其の本旨正道を逸し邪路を趨るゝが如きは、希直の斷じて取らざるところなり。希直の父愚庵、師潛溪の見も、亦大略是の如しと雖も、希直の性の方正端嚴を好むや、おのづからは是の如くならざるを得ざるものあり、希直決して自ら欺かざる也。

孝孺の父は洪武九年を以て歿し、師は同十三年を以て歿す。洪武十五年吳沉の薦を以て太祖に

見ゆ。太祖其の舉止端整なるを喜びて、皇孫に謂つて曰く、此莊士、當に其才を老いしめて以て汝を輔けしめんと。閱十年にして又薦められて至る。太祖曰く、今孝孺を用ゐるの時に非ずと。太祖が孝孺を器重して、而も學用せざりしは何ぞ。後人こゝに於て慮を致すもの多し。然れども此を強ひて解す可からず。太祖が孝孺を愛重せしは、前後召見の間に於て、たま／＼仇家の爲に累せられて孝孺の闕下に械送せられし時、太祖其名を記したまひ居て、特に釋されしことあるに徴しても明らかなり。孝孺の學徳漸く高くして、太祖の第十一子蜀王椿、孝孺を聘して世子の傳となし、尊ぶに殊禮を以てす。王の孝孺に賜ふの書に、余一日見ざれば三秋の如き有りの語あり。又王が孝孺を送るの詩に、士を閱す孔だ多し。我は希直を敬すの句あり。又其一章に、
謙にして以て みづから收し、
卑うして以て みづから持す。

雅容 儒雅
鸞鳳の 儀あり
とあり、又其の賜詩三首の一に
文章 金石を奏し、

給佩 儀刑を視る。
應に世 三輔に遊ふべし、
焉んぞ能く 一經に困せん。

の句あり。王の優遇知る可くして、孝孺の恩に答ふるに道を以てせるも、亦知るべし。王、孝孺の讀書の廬に題して正學といふ。孝孺はみづから遜志齋といふ。人の正學先生といふものは、實に劉王の賜題に因るなり。

太祖崩じ、皇太孫立つに至つて、廷臣交々孝孺を薦む。乃ち召されて翰林に入る。徳宗素より隆んにして、一時の倚重するところとなり、政治より學問に及ぶまで、帝の咨詢を承くること殆ど間無く、翌二年文學博士となる。燕王兵を擧ぐるに及び、日に召されて謀議に參し、詔檄皆孝孺の手に出づ。三年より四年に至り、孝孺甚だ煎心焦慮すと雖も、身武臣にあらず、皇師數々屈して、燕兵遂に城下に到る。金川門守を失ひて、帝みづから大内を燒きたまふに當り、孝孺伍雲等の爲に執へられて獄に下さる。

燕王志を得て、今既に帝たり。素より孝孺の才を知り、又道衍の言を聴く。乃ち孝孺を赦して之を用ゐんと欲し、待つに不死を以てす。孝孺屈せず。よつて之を獄に繋ぎ、孝孺の弟子廖銘

廖銘をして、利害を以て説かしむ。二人は徳慶侯廖樞の子なり。孝孺怒つて曰く、汝等予に従つて幾年の書を讀み、還つて義の何たるを知らざるやと。二人説く能はずして已む。帝猶孝孺を用ゐんと欲し、一日に諭を下すこと再三に及ぶ。然も終に從はず。帝即位の詔を草せんと欲す、衆臣皆孝孺を擧ぐ。乃ち召して獄より出でしむ。孝孺喪服して入り、慟哭じて悲み、聲殿陛に徹す。帝みづから榻を降りて勞らひて曰く、先生勞苦する勿れ。我周公の成王を輔けしに法らんと欲するのみと。孝孺曰く、成王いづくにか在ると。帝曰く、渠みづから焚死すと。孝孺曰く、成王即存せずんば、何ぞ成王の子を立てたまはざるやと。帝曰く、國は長君に頼る。孝孺曰く、何ぞ成王の弟を立てたまはざるや。帝曰く、これ朕が家事なり、先生はなはだ勞苦する勿れと。左右をして筆札を授けしめて、おもむるに詔して曰く、天下に詔する、先生にあらずんば不可なりと。孝孺大に數字を批して、筆を地に擲つて、又大哭し、且罵り且哭して曰く、死せんには即ち死せんのみ、詔は斷じて草す可からずと。帝勃然として聲を大にして曰く、汝いづくんぞ能く違に死するを得んや、たとへ死するとも、獨り九族を顧みざるやと。孝孺いよく齋つて曰く、すなはち十族なるも我を奈何にせんやと。聲甚だ厲し。帝もと雄傑剛猛なり、是に於て大に怒つて、刀を以て、孝孺の口を抉らしめて、復之を獄に繋す。

孝孺の宋濂溪に知らるゝや、蓋し其の釋統三篇と後正統論とを以てす。四篇の文、雄大にして莊嚴、其大旨、義理の正に據つて、情勢の歸を斥け、王道を尙び、霸略を卑み、天下を全有して、海内に號令する者と雖も、其道に於てせざる者は、目して、正統の君主とすべからずとするに在り。秦や隋や王莽や、晉宋・齊梁や、則天や符堅や、此皆これをして天下を有せしむる數百年に踰ゆと雖も、正統とす可からずと爲す。孝孺の言に曰く、君たるに貴ぶ所の者は、豈其の天下を有するを謂はんやと。又曰く、天下を有して而も正統に比す可からざる者三、篡臣也、賊后也、夷狄也と。孝孺篇後に書して曰く、予が此文を爲りてより、未だ嘗て出して以て人に示さず。人の此言を聞く者、咸予を警笑して以て狂と爲し、或は陰に之を誣訴す。其の然りと謂ふ者は、獨り予が師太史公と、金華の胡公翰とのみと。夫れ正統變統の論、もとより史の爲にして發すと雖も、君たるに貴ぶ所の者は豈其の天下を有するを謂はんやと爲す、斯の如きの論を爲せるの後二十餘年にして、一朝篡奪の君に面し、其の天下に詰ぐるの詔を草せんことを逼らる。嗚呼、運命遭逢も亦奇なりといふべし。孝孺又嘗て筆の銘を爲る。曰く、

妄に動けば 悔有り、
道は 悖る可からず。

汝 才ありと謂ふ勿れ、
後に 萬世あり。

又嘗て紙の銘を爲る。曰く、

之を以て言を立つ、其の道を載せんを欲す。
之を以て事を記す、其の民を利せんを欲す。
之を以て教を施す、其の義ならんを欲す。
之を以て法を制す、其の仁ならんを欲す。

此等の文、蓋し少時の爲る所なり。嗚呼、運命遭逢、又何ぞ奇なるや、二十餘年の後にして、筆紙前に在り、これに臨みて詔を草すれば、富貴我を運つこと久し、これに臨みて命を拒まば、刀鋸我に加はらんこと疾し。嗚呼、正學先生、こゝに於て、成王いづくに在りやと論じ、こゝに於て筆を地に擲つて哭す、父に負かず、師に負かず、天に合して人に合せず、道に同じうして時に同じうせず、溥々烈々として、屈せず撓まず、苦節伯夷を慕はんとす。壯なる哉。

帝、孝孺の一族を收め、一人を收むる毎に輒ち孝孺に示す。孝孺顧みず。乃ち之を殺す。孝孺の妻鄭氏と諸子とは、皆先づ經死す。二女逮へられて准を過ぐる時、相與に橋より投じて死す。

季弟孝友また逮へられて將に戮せられんとす。孝孺之を目して涙下りければ、流石は正學の弟なりけり。

阿兄 何ぞ必ずしも 涙消々たらむ、一

義を取り 仁を成す 此間に在り。

華表 柱頭 千歳の後、

旅魂 舊に依りて 家山に到らん。

と吟じて戮せられぬ。母族林彦清等、妻族鄭原吉等九族既に戮せられて、門生等まで、方氏の族として罪なはれ、坐死する者およそ八百七十三人、遠調配流さるゝもの數ふ可からず、孝孺は終に聚寶門外に磔殺せられぬ。孝孺慨然、絶命の詞を爲りて戮に就く。時に年四十六、詞に曰く、

天降一亂離二分孰知其由。

奸臣得計兮謀國用猶。

忠臣發憤兮血淚交流。

以此殉君兮抑又何求。

嗚呼哀哉兮庶不我尤。

廖 廖銘は孝孺の遺骸を拾ひて聚寶門外の山上に葬りしが、二人も亦收められて戮せられ、同じ門人林嘉猷は、かつて燕王父子の間に反間の計を爲したるもの、此亦戮せられぬ。

方氏一族是の如くにして殆ど絶えしが、孝孺の幼子徳宗、時に甫めて九歳、寧海縣の典史魏公澤の護匿するところとなりて、死せざるを得、後孝孺の門人俞公允の養ふところとなり、遂に俞氏を冒して、子孫繁衍し、萬曆三十七年には二百餘丁となりしこと、松江府の儒學の申文に見え、復姓を許されて、方氏また榮ゆるに至れり。廖氏二子及び門人王稔等拾骸の功また空しからず、萬曆に至つて墓碑祠堂成り、祭田及び嘯風亭等備はり、松江に求忠書院成るに及び。世に在る正學先生の如くにして、豈後無く祠無くして泯然として滅せんや。

節に死し族を夷せらるゝの事、もと悲壯なり。是を以て後の正學先生の墓を過ぎる者、愴然として感じ、泣然として泣かざる能はず。乃ち祭帛慷慨の詩、累篇積章して甚だ多きを致す。衛承芳が古風一首、中に句あり、曰く、

古來 馬を叩く者、

采薇 逸民を稱す。

明の徳 証そ周に遜らん。

乃ち其の仁を成す無からんや。

と。劉秉忠を慕ふの人道衍は其の功を成して秉忠の如くなるを得、伯夷を慕ふの人方希直は其の節を成して伯夷に比せらるゝに至る。王思任二律の一に句あり、曰く、

十族 魂の 暗き月に依る有り、

九原 愧の 青燈に付する無し。

と。李維楨五律六首の中に句あり、曰く、

國破れて 心仍在り、

身危うして 舌 尙存す。

又句あり、曰く、

氣は壯なり 河山の色、

神は留まる 宇宙の身。

燕王今は燕王にあらず、儼として九五の位に在り、明年を以て改めて永樂元年と爲さんとす。而して建文皇帝は如何。燕王の言に曰く、予始め難に遇ふ、已むを得ずして兵を以て禍を救ひ、

誓つて奸惡を除き、宗社を安んじ、周公の勳を庶幾せんとす。意はざりき少主予が心を亮とせず、みづから天に絶てりと。建文皇帝果して崩せりや否や。明史には記す、帝終る所を知らずと。又記す、或は云ふ帝地道より出で亡ぐと。又記す、滇黔巴蜀の間、相傳ふ帝の僧たる時の往來の跡ありと。これ言を二三にする者也。帝果して火に赴いて死せるか、抑、又髪を薙いで逃れたるか。明史卷一百四十三、牛景先の傳の後に、忠賢奇祕錄及び致身錄等の事を記して、録は蓋し晩出附會、信するに足らずの語を以て結び、暗に建文帝出亡、諸臣庇護の事を否定するの口氣あり。然れ共卷三百四、鄭和傳には、成祖、惠帝の海外に亡げたるを疑ひ、之を蹤跡せんと欲し、且つ兵を異域に輝かし、中國の富強を示さんことを欲すと記せり。鄭和の始めて西洋に航せしは、燕王志を得てよりの第四年、即ち永樂三年なり。永樂三年にして猶疑ふあるは何ぞや。又給事中胡濙と内侍朱祥とが、永樂中に荒微を遍歴して數年に及びしは、卷二百九十九に見ゆ。仙人張三丰を索めんとすといふを其名とすと雖も、山谷に仙を索めしむるが如き、永樂帝の聰明勇決にして豈眞に其事あらんや。得んと欲するところの者の、眞仙にあらずして、別に存するあること、知る可き也。蓋し此時に當つて、元の餘孽猶所在に存し、漠北は論無く、西陲南裔、亦盡くは明の化に順はず。野火燒けども盡きず、春風吹いて亦生せんとするの勢あり。且つや天一豪傑を鐵

門關邊の礪石に生じて、カザン (Kazan) 弑されて後の大帝國を治めしむ。これを帖木兒 (Timur) と爲す。西人の所謂タメルラン也。帖木兒サマルカンドに據り、四方を攻略して威を振ふ甚だ大に、明に對しては貢を納ると雖も、太祖の末年に使用したる傅安を留めて歸らしめず、之を要して領内諸國を歴遊すること數萬里ならしめ、既に印度を掠めて、デリヒを取り、波斯を襲ひ、土耳其を征じ、心ひそかに支那を窺ひ、四百餘州を席卷して、大元の遺業を復せんとするあり。永樂帝の燕王たるや、塞北に出征して、よく胡情を知る。部下の諸將もまた夷事に通ずる者多し。王の南する、幕中に番騎を藏す。凡そ此等の事に徴して、永樂帝の塞外の狀勢を曉れるを知るべし。若し建文帝にして走つて域外に出で、輻強にして自大なる者に依るあらば、外敵は中國を覬ふの便を得て、義兵は邦内に起る可く、重耳一たび逃れて卻つて勢を得るが如きの事あらんとす。是れ永樂帝の懼れ憂ふるところたらざんばあらず。鄭和の艦を泛めて遠航し、胡濙の仙を索めて遍歴せる、密旨を街むところあるが如し。而して又鄭和實に威を海外に示さんとし、胡は實に異を幽境に詢へるや論無し。善く射る者は雁影を重ならしめて而して射、善く謀る者は機會を復ならしめて而して謀る。一箭二雁を獲ずと雖も、一雁を失はず、一計雙功を收めずと雖も、一功を得る有り。永樂帝の智、豈敢て建文を索むるを名として使を發するを爲さんや。況んや又鄭和は

宦官にして、胡濙と偕にせるの朱祥も内侍たるをや。秘意察す可きあるなり。

鄭和は王景弘等と共に出て使しぬ。和の出づるや、帝、袁柳莊の子の袁忠徹をして相せしむ。忠徹曰く可なりと。和の率ゐる所の將卒二萬七千八百餘人、船長さ四十四丈、廣さ十八丈の者、六十二、蘇州劉家河より海に泛びて福建に至り、福建五虎門より帆を揚げて海に入る。閱三年にして、五年九月還る。建文帝の事、得る有る無し。而れども諸蕃國の使者和に隨つて朝見し、各其方物を貢す。和又三佛齊國の酋長を俘として獻す。帝大に悦ぶ。是より建文の事に關せず、専ら國威を揚げしめんとして、再三和を出す。和の使を奉ずる、前後七回、其の間、或は錫蘭山 (Ceylon) の王阿烈苦奈兒と戰つて之を擒にして獻じ、或は蘇門答刺 (Sumatra) の前の前の僞王子蘇幹刺と戰つて、其妻子を併せて俘として獻じ、大に南西諸國に明の威を揚げ、遠く勿魯漢斯 (Holmuzze ヌルシヤ) 麻林 (Malin アフリカ?) 祖法兒 (Dahhar アラビヤ) 天方 (Beirutullah) House of God の譯、メッカ、アラビヤ) 等に至れり。明史外國傳西南方のや、詳なるは、鄭和に隨行したる鞏珍の著はせる西洋蕃國志を探りたるに本づく歟といふ。胡濙等もまた得る無くして已みぬ。然も張三手を索めしこと、天下の知る所なり。乃ち三手の

居りし所の武當、大和山に觀を營み、夫を役する三十萬、質を費す百萬、工部侍郎郭璠、陸平侯張信等、事に當りしといふ。三丰嘗て武當の諸巖壑に遊び、此山異日必ず大に興らんといひしもの、實となつてこゝに現じたる也。

建文帝は如何にせしぞや。傳へて曰く、金川門の守を失ふや、帝自殺せんとす。翰林院編修程濟白す、出亡したまはんに如かじと。少監王鉞跪いて進みて白す。昔高帝升遐したまふ時、遺篋あり、大難に臨まば發くべしと宣ひぬ。謹んで奉先殿の左に收め奉れりと。羣臣口々に、疾く出すべしといふ。宦者忽にして一の紅なる篋を昇き來りぬ。視れば四圍は固むるに鐵を以てし、二鎖も亦鐵を灌ぎありて開くべくも無し。帝これを見て大に慟きたまひ、今はとて火を大内に放たせたまふ。皇后は火に赴きて死したまひぬ。此時程濟は辛くも篋を碎き得て、篋中の物を取出す。出でたる物は抑何ぞ。釋門の人ならで誰かは要すべき、大内などには有るべくも無き度牒といふもの三張ありたり。度牒は人の家を出て僧となるべき官の可しを認むる牒にて、これ無ければ僧も暗き身たるなり。三張の度牒、一には應文の名の録され、一には應能の名あり、一には應賢の名あり、袈裟、僧帽、鞋、剃刀、一々俱に備はりて、銀十錠添はり居ぬ。篋の内に朱

書あり、之を讀むに、應文は鬼門より出で、餘は水關御溝よりして行き、薄暮にして神樂觀の西房に會せよ、とあり。眾臣驚き戰きて面々相看るばかり、しばらくは言ふ者も無し。やゝありて天子、數なり、と仰あり。帝の諱は允炆、應文の法號、おのづから相應するが如し。且つ明の基を開きし太祖高皇帝はもと僧にましましき。後にこそ天下の主ともなり玉ひたれ、元の順宗の至正四年十七におはしける時は、疫病大に行はれて、御父御母兄上幼き弟皆亡せたまへるに、家貧にして棺槨の供だに爲したまふ能はず、藁葬といふ悲しくも悲しき事を取行はせ玉はんとて、仲の兄と二人してみづから遺骸を昇きて山麓に至りたまへるに、繩絶えて又如何ともする能はず、仲の兄馳還つて繩を取りしといふ談だに遣りぬ。其の仲の兄も亦亡せられたれば、孤身依るところなく、遂に皇覺寺に入りて僧と爲り、食を得んが爲に合沘に至り、光固汝穎の諸州に托鉢修行し、三歳の間は草鞋竹笠、憂き雲水の身を過したまへりといふ。帝は太祖の皇孫と生れさせたまひて、金殿玉樓に人となりたまひたれども、如是因、如是緣、今また袈裟念珠の人たらんとす。不思議といふも餘あり。程濟即ち御意に従ひて祝髮しまゐらす。萬乘の君主金冠を墜し、剃刀の冷光翠髪を薙ぐ。悲痛何ぞ能く堪へむや。吳王の教授楊應能は、臣が名度牒に應ず、願はくは祝髮して隨ひまつらんと白す。監察御史葉希賢、臣が名は賢、應賢たるべきこと疑無しと白す。

各髪を削り衣を易へて襟を披く。殿に在りしもの凡そ五六十人、痛哭して地に倒れ、俱に矢つて随ひまつらんとまをす。帝、人多ければ得失を生ずる無きを得ず、とて麾いて去らしめたまふ。御史曾鳳韶、願はくは死を以て陛下に報いまつらん、と云ひて退きつ、後果して燕王の召に應ぜずして自殺しぬ。諸臣大に慟きて漸くに去り、帝は鬼門に至らせたまふ。従ふ者實に九人なり。至れば一舟の岸に在るあり。誰ぞと見るに神樂觀の道士王昇にして、帝を見て叩頭して萬歳を稱へ、嗚呼、來らせたまへるよ、臣昨夜の夢に高皇帝の命を蒙りて、此にまゐり居たり、と申す。乃ち舟に乗じて太平門に至りたまふ。昇導きまゐらせて觀に至れば、恰も已に薄暮なりけり。陸路よりして楊應能、葉希賢等十三人同じく至る。合二十二二人、兵部侍郎廖平、刑部侍郎金焦、編修趙天泰、檢討程亨、按察使王良、參政蔡運、刑部郎中梁田玉、中書舍人梁良玉、梁中節、宋和、郭節、刑部司務馮灌、鎮撫牛景先、王資、劉仲、翰林侍詔鄭洽、欽天監正王之臣、太監周恕、徐王府賓輔史彬と、楊應能、葉希賢、程濟となり。帝、今後はたゞ師弟を以て稱し、必ずしも主臣の禮に拘らざるべしと宜ふ。諸臣泣いて諾す。廖平こゝに於て人々に謂つて曰く、諸人の隨はんことを願ふは、固よりなり、但し隨行者の多きは功無くして害あり、家室の累無くして、膂力の擗ぎ衛るに足る者、多きも五人に過ぎざるを可とせん、餘は俱に遙に應援を爲さば、

可ならんと。帝も、然るべしと爲したまふ。應能、應賢の二人は比丘と稱し、程濟は道人と稱して、常に左右に侍し、馮灌は馬二子と稱し、郭節は雪菴と稱し、宋和は雲門僧と稱し、趙天泰は衣葛翁と稱し、王之臣は補鍋を以て生計を爲さんとして老補鍋と稱し、牛景先は東湖樵夫と稱し、各々姓を埋め名を變じて陰に陽に扈從せんとす。帝は滇南に往きて西平侯に依らんとしたまふ。史彬これを危ぶみて止め、臣等の中の、家いさゝか足りて、且夕に備ふ可き者の許に錫を置めたまひ、緩急移動したまはゞ不可無かるべしと白す。帝もこれを理ありとしたまひて、廖平、王良、鄭洽、郭節、王資、史彬、梁良玉の七家を、かはるゝ主とせんことに定まりぬ。翌日舟を得て帝を史彬の家に奉せんとす。同乗するもの八人、程、葉、楊、牛、馮、宋、史なり、餘は皆涙を揮つて別れまゐらす。帝は道を深陽に取りて、吳江の黃溪の史彬の家に至りたまふに、月の終を以て諸臣また漸く相聚まりて伺候す。帝命じて各々歸省せしめたまふ。燕王位に即きて、諸官員の職を抛つて遷去りし者の官籍を削る。吳江の邑丞鞏德、蘇州府の命を以て史彬が家に至り、官を奪ひ、且曰く、聞く君が家建文皇帝をかしづく。彬驚いて曰く、全く其事無しと。次の日、帝、楊葉程の三人と共に吳江を出で、舟に上りて京口に至り、六合を過ぎ、陸路襄陽に至り、廖平が家に至りたまふに、其後を訊ふ者ありければ、遂に意を決して雲南に入りたまふ。

命 運

永樂元年、帝雲南の永嘉寺に畱まりたまふ。二年、雲南を出で、重慶より襄陽に抵り、また東して、史彬の家に至りたまふ。畱まりたまふこと三日、杭州、天台、雁蕩の遊をなして、又雲南に歸りたまふ。

三年、重慶の大竹善慶里に至りたまふ。此年若くは前年の事なるべし、帝金陵の諸臣惨死の事を聞きたまひ、泣然として泣きて曰く、我罪を神明に獲たり、諸人皆我が爲にする也と。

建文帝は今僧應文たり。心の中はいざ知らず、袈裟に枯木の身を包みて、山水に白雲の跡を逐ひ、或は草庵、或は茅店に、閑坐し漫遊したまへるが、燕王今は皇帝なり、萬乘の尊に居りて一身の安き無し。永樂元年には、韃靼の兵、遼東を犯し、永平に寇し、二年には韃靼と瓦剌(Oirats, 西部蒙古)との相和せざる爲に、邊患無しと雖も、三年には韃靼の塞下を伺ふあり。特に此年はタメルラン大兵を起して、道を別失八里(Big Balik)に取り、甘肅よりして亂入せんとするの事あり。甘肅は京を距る遠しと雖も、タメルランの勇威猛勢は、太祖の時よりして知るところたり、永樂帝の憂慮察す可し。此事明史には其の外國傳に、朝廷、帖木兒の道を別失八里に假りて兵を率ゐて東するを聞き、甘肅總兵官宋晟に敕して儆備せしむ、とあるに過ぎず。然れども塞外の

事には意を用ゐること密にして、永樂八年以後、數々漠北を親征せしほどの帝の、帖木兒東せんとするを聞きては、奚んぞ能く晏然たらん。太祖の洪武二十八年、傅安等を帖木兒の許に使せしめて、安等猶未だ還らず、忽にして此報を得、疑慮する無きを得んや。帖木兒、父は答刺豈(Tai-ragai)元の至元二年を以て生る。生れて跋なりしかば、惡む者チムールレンク(Timurlenk)と呼ぶ。レンクは跋の義の波斯語なり。タメルランの稱これによつて起る。人となり雄毅、兵を用ゐる政を爲すを善くす。太祖の明の基を開くに前後して大に勢を得、洪武五年より後、征戰三十餘年、威名亞非利加、歐羅巴に及ぶ。帖木兒は回教を奉ず。明の初、回教の徒の甘肅に居る者を放つ。回徒多く帖木兒の領土に歸す。帖木兒の甘肅より入らんとせるも、故ある也。永樂元年(1403)より永樂三年に至るまで帖木兒の許に在りしクラウイヨ(Olavijo, Castilian Ambassador)記す、タメルラン、支那帝使を西班牙帝使の下に坐せしめ、吾見たり友たる西帝の使を、賊たり無頼の徒たる支那帝の使の下に坐せしむる勿れと云ひしと。又同時タメルラン軍營に事へしバワリヤ人シルトベルゲル(T. Schiltberger)記す、支那帝使進貢を求む、タメルラン怒つて曰く、吾復進貢せざらん、貢を求めば帝みづから來れと。乃ち使を發して兵を徵し、百八十萬を得、將に發せんとしたりと。西曆千三百九十八年は、タメルラン西部波斯を征したりしが、其冬明の太

祖及び埃及王の死を知りたりと也。帖木兒が意を四方に用ゐたる知る可し。然らば則ち燕王の兵を起し、より終に位に即くに至るの事、タメルラン之を知る久し。建文二年(1400)よりタメルランはオットマン帝國を攻めしが、外に在る五年にして、永樂二年(1405)サマルカンドに還りぬ。カスチリヤの使と、支那の使とを引見したるは、即ち此歳にして、其の翌年直に馬首を東にし、争亂の餘の支那に亂入せんとしたる也。永樂帝の此報を得るや、宋晟に敕して備備せしむるのみならず、備へたるあること知りぬ可し。宋晟は好將軍なり、平羌將軍西寧侯たり。かつて御史ありて晟の自ら專にすることを劾しけるに、帝聽かずして曰く、人に任ずる專ならざれば功を成す能はず、況んや大將は一邊を統制す、いづくんぞ能く文法に拘らんと。又嘗て曰く、西北の邊務は、一に以て卿に委ぬと。其の材武稱許せらるゝ是の如し。タメルランの來らんとするや、帝また別に慮るゝところあり。蓋し燕の兵を擧ぐるに當つて、史之を明記せずと雖も、韃靼の兵を借りて以て功を成せること、蔚州を圍めるの時に徴して知る可し。建文未だ死せず、從臣の中、道衍金忠の輩の如き策士あつて、西北の胡兵を借るあらば、天下の事知る可からざるなり。鄭和胡濙の出づるある、徒爾ならんや。建文の草庵の夢、永樂の金殿の夢、其のいづれか安くして、いづれか安からざりしや。試に之を問はんと欲する也。幸にしてタメルランは、千四百〇五年

即永樂三年二月の十七日、病んでオトラル(Otural)に死し、二雄相下らずして龍圖虎争するの慘禍を禹域の民に被らしむること無くして已みぬ。

四年應文は西平侯の家に至り、止まること旬日、五月庵を白龍山に結びぬ。五年冬、建文帝、難に死せる諸人を祭り、みづから文を爲りて之を哭したまふ。朝廷帝を索むること密なれば、帝深く潛みて出でず。此歳傳安朝に歸る。安の胡地を歴游する數萬里、域外に留まる殆ど二十年、著す所西遊勝覽詩あり。後の好事の者の喜び讀むところとなる。タメルランの後の哈里(Hali)雄志無し。使を安に伴はしめ方物を貢す。六年、白龍庵災あり、程濟募り葺く。七年、建文帝、善慶里に至り、襄陽に至り、瀛に還る。朝廷密に帝を雲南貴州の間に索む。

八年春三月、工部尙書嚴震安南に使用するの途にして、忽ち建文帝に雲南に遇ふ。舊臣猶錦衣にして、舊帝既に布衲なり。震たゞ恐懼して落涙止まらざるのみ。帝、我を奈何せんとするぞや、と問ひたまふ。震對へて、君は御心のまゝにおはせ、臣はみづから處する有らんと申す。人生の悲しきに堪へずや有りけん、其夜驛亭にみづから縊れて死しぬ。夏帝白龍庵に病みたまふ。史彬、程亨、郭節たまゝ至る。三人留まる久しくして、帝これを遣りたまひ、今後再び來る勿れ、我安居す、心づかひすなと仰す。帝白龍庵を捨てたまふ。此歳永樂帝は去年丘福を漠北に失

へるを以て北京を發して胡地に入り、本雅失里 (Benyashili) 阿魯台 (Altai) 等と戦ひて勝ち、擒孤山、清流泉の二處に銘を勒して還りたまふ。

九年春、白龍庵有司の毀つところとなる。夏建文帝浪穹鶴慶山に至り、大喜庵を建つ。十年楊應能卒し、葉希賢次いで卒す。帝因つて一弟子を納れて應慈と名づけたまふ。十一年旬に至りて還り、十二年易敷を學びたまふ。此歳永樂帝また塞外に出で、瓦刺を征したまふ。皇太孫九龍口に於て危難に臨む。十三年建文帝衡山に遊ばせたまふ。十四年、帝程濟に命じて從亡傳を録せしめ、みづから敍を爲らる。十五年史彬白龍庵に至る、庵を見ず。驚訝して帝を索め、終に大喜庵に遇ひ奉る。十一月帝衡山に至りたまふ。避くるある也。十六年、黔に至りたまふ。十七年始めて佛書を觀たまふ。十八年峨眉に登り、十九年粵に入り海南諸勝に遊び、十一月還りたまふ。此歳阿魯台反す。二十年永樂帝、阿魯台を親征す。二十一年建文帝章臺山に登り、漢陽に遊び、大別山に翌りたまふ。

二十二年春、建文帝東行したまひ、冬十月史彬と旅店に相遇ふ。此歳阿魯台大同に寇す。去年阿魯台を親征し、阿魯台遁れて戦はず、師空しく還る。今又塞を犯す。永樂帝また親征す。敵に遇はずして、軍食足らざるに至る。歸路檢木川に次し、急に病みて崩す。蓋し疑ふ可きある也。

永樂帝既に崩じ、建文帝猶在り、帝と史彬と客舎相遇ひ、老實貞良の忠臣の口より、篡國奪位の叔父の死を聞く。世事測る可からずと雖も、難髪して宮を脱し、墮涙して舟に上るの時、いづくぞ茅店の茶後に深仇の冥土に入るを談ずるの今日あるを思はんや。あゝ亦奇なりといふべし。知らず應文禪師の如何の感を爲せるかを。即ち彬とともに江南に下り、彬の家に至り、やがて天台山上に登りたまふ。

仁宗の洪熙元年正月、建文帝觀音大士を潮音洞に拜し、五月山に還りたまふ。此歳仁宗また崩じて、帝を索むること、漸くに忘れらる。宣宗の宣德元年秋八月、從亡諸臣を菴前に祭りたまふ。此歳漢王高煦反す。高煦は永樂帝の子にして、仁宗の同母弟、宣德帝の叔父なり。燕王の兵を擧ぐるや、高煦父に従つて力戦す。材武みづから負み、騎射を善くし、酷だ燕王に肖たり。永樂帝の儲を立つるに當つて、丘徳、王寧等の武臣意を高煦に屬するものあり。高煦亦竊に戦功を待みて期するところあり。然れども永樂帝長子を立て、高煦を漢王とす。高煦快快たり。仁宗立つて其歳崩じ、仁宗の子大位に即くに及びて、遂に反す。高煦の宣德帝に於けるは、猶燕王の建文帝に於けるが如きなり。其父反して而して帝たり、高煦父の爲せるところを學んで、陰謀至らざる無し。然れども事發するに至つて、帝親征して之を降す。高煦乃ち廢せられて庶人となる。

後鎖繫されて逍遙城に内れらるゝや、一日帝の之を熟視するにあふ。高煦急に立つて帝の不意に出で、一足を伸して帝を勾し地に踏せしむ。帝大に怒つて力士に命じ、大銅缸を以て之を覆はしむ。高煦多力なりければ、缸の重さ三百斤なりしも、項に缸を負ひて起つ。帝炭を缸上に積むこと山の如くならしめて之を燃す。高煦生きながらに焦熱地獄に墮し、高煦の諸子皆死を賜ふ。燕王範を垂れて反を取てし、身幸にして志を得たりと雖も、遂に域外の榆木川に死し、愛子高煦は焦熱地獄に墮つ。如是果、如是報、悲む可く悼む可く、驚く可く歎ずべし。

杖錫 來り遊びて歲月深し、

山雲 水月 閑吟に傍ふ。

塵心 消盡して 些子も無し、

受けず 人間の物色の侵すを。

これより帝優游自適、居然として一頭陀なり。九年史彬死し、程濟猶從ふ。帝詩を善くしたまふ。嘗て賦したまへる詩の一に曰く、
牢落 西南 四十秋

蕭々たる白髪 已に頭に盈つ。

乾坤 恨あり 家いづくにか在る。

江漢 情無し 水おのづから流る。

長樂 宮中 雲氣散じ、

朝元 閣上 雨聲收まる。

新蒲 細柳 年々緑に、

野老 聲を吞んで 哭して未だ休まず。

又嘗て貴州金竺長官司羅永菴の壁に題したまへる七律二章の如き、皆誦す可し。
其二に曰く、

榜戲を聞し罷んで 磬も敲くに慚し。

笑つて看る 黃屋 團瓢を寄す。

南來 瘴嶺 千層河に、

北望 天門 萬里遙なり。

飲段 久しく忘る 飛鳳の聲、

袈裟 新に換る 竟龍の袍。

百官 此日 知る何れの處ぞ、

唯有り 羣鳥の 早晚に朝する。

建文帝是の如くにして山青く雲白き處に無事の餘生を送り、僊人隱士の踪跡杳渺として知る可からざるが如くに身を終る可く見えしが、天意不測にして、魚は深淵に潜めども案に上るの日あり、禽は高空に翔くれども天に宿するに由無し。忽然として復宮に入るに及びたまふ。其事まことに意表に出づ。帝の同寓するところの僧、帝の詩を見て、遂に建文帝なることを猜知し、其詩を竊み、思恩の知州岑瑛のところに至り、吾は建文皇帝なりといふ。意蓋し今の朝廷また建文を窘めずして厚く之を奉ず可きをおもへるなり。瑛はこれを聞きて大に驚き、盡く同寓の僧を得て之を京師に送り、飛草して以聞す。帝及び程濟も京に至るの數に在り。御史僧を糾すに及びて、僧曰く、年九十餘、今た祖父の陵の傍に葬られんことを思ふのみと。御史、建文帝は洪武十年に生れたまひて、正統五年を距る六十四歳なるを以て、何ぞ九十歳なるを得んとて之を疑ひ、やうやく詰問して遂に其僞なるを斷す。僧實は鈞州白沙里の人、楊應祥といふものなり。よつて奏して僧を死に處し、從者十二人を配流して邊を成らしめんとす。帝其中に在り。是に於て已む

を得ずして其實を告げたまふ。御史また今更に大に驚きて、此事を密奏す。正統帝の御父宣宗皇帝は漢王高煦の反に會ひたまひて、幸に之を降したまひたれども、叔父の爲に兵を動すに至りたる境遇は、まことに建文帝に異なること無し。其の宣宗に紹ぎたまひたる天子の、建文帝に對して如何の感をや爲したまへる。御史の密奏を聞召して、即ち宦官の建文帝に親しく事へたる者を召して實否を探らしめたまふ。吳亮といふものあり、建文帝に事へたり。乃ち亮をして應文の果して帝なるや否やを探らしめたまふ。亮の應文を見るや、應文たゞちに、汝は吳亮にあらずや、と云ひたまふ。亮猶然らざるを申せば、帝舊き事を語りたまひて、爾亮に非ずといふや、と仰す。亮胸塞がりて答ふる能はず、哭して地に伏す。建文帝の左の御趾には黒子ありたまひしことを思ひ出でて、亮近づきて、御趾を摩し視るに、正しく其のしるし御座したりければ、懷舊の涙遏めあへず、復仰ぎ視ること能はず、退いて其由を申し、さて後自經して死にけり。こゝに事實明らかになりしかば、建文帝を迎へて西内に入れたてまつる。程濟この事を聞きて、今日臣が事終りぬとて、雲南に歸りて庵を焚き、同志の徒を散じぬ。帝は宮中に在り、老佛を以て呼ばれたまひ、壽をもて終りたまひぬといふ。

女仙外史に、忠臣等名山幽谷に帝を索むるを記する、有るが如く無きが如く、實の如く虚の如く、縹渺有趣の文を爲す。永樂帝檢木川の崩を記する、鬼母の一劍を受くとなし、又野史を引いて、永樂帝檢木川に至る、野獸の突至するに遇ひ、之を搏す、攫されてたゞ半軀を剩すのみ。殮して而して匠を殺す、其迹を泯滅する所以なりと。野獸か、鬼母か、吾之を知らず。西人或は帝胡人の殺すところとなると爲す。然らば則ち帝丘福を尤めて、而して福と其死を同じうする也。帝勇武を負ひ、毎戦危きを買す、檢木川の崩、蓋し明史諱みて書せざるある也。

數か、數か。紅篋の度牒、袈裟、剃刀、噫又何ぞ奇なるや。道士の靈夢、御溝の片舟、噫又何ぞ奇なるや。吾嘗て明史を讀みて、其奇に驚き、建文帝と共に所謂數なりの語を發せんと欲す。後又道衍の傳を讀む。中に記して曰く、道衍永樂十六年死す。死に臨みて、帝言はんと欲するところを問ふ。衍曰く、僧溥治といふもの聚がるゝこと久し。願はくは之を赦したまへと。溥治は建文帝の主録僧なり。初め帝の南京に入るや、建文帝僧となりて遁れ去り、溥治狀を知ると言ふものあり。或は溥治の所に匿すと云ふあり。帝乃ち他事を以て溥治を禁めて、而して給事中胡漢等に命じて徧く建文帝を物色せしむ、之を久しくして得ず。溥治坐して聚がるゝこと十餘年、是

に至りて帝道衍の言を以て命じて之を出さしむ。衍頓首して謝し、尋で卒すと。候中の朱書、道士の靈夢、王鉞の言、吳亮の死と道衍の請と、溥治の默と、嗚呼、數たると數たらざると、道衍蓋し知ることあらん。而して檢木川の客死、高煦の焦死、數たると數たらざるとは、道衍袁珙の輩の固より知らざるところにして、たゞ天之を知ることあらん。

(大正八年四月作)

自跋

露伴道人

自 嘉定の錢大昕は、博く羣籍に通じ、達識能文、もとより乾隆の巨星にして、一代これを仰ぎ視る。好く史を考へ、著すところ、二十二史攻異、元史藝文志等あり、人皆之を稱す。其の筆するところに、萬先生傳一篇あり。萬氏、名は斯同、字は季野、鄞の人。明の崇禎十六年生る、或は云ふ十二年生ると。清の康熙四十一年卒す。明清の際、偉材輩出す。安溪の李厚庵、最も許可する少し。曰く、吾が生平の見る所數子に過ぎず、顧寧人、萬季野、閩百詩、これ眞に以て石渠の顧問の選に備ふるに足る者也と。其學の精博知る可し。季野の著すところ、讀禮通考、一百六十卷、明史稿五百卷、歷代史表六十四卷等有り。初め康熙十八年、詔して明史を修めしむ。大學士徐元文薦めて史局に入れんと欲す、斯同力辭す、乃ち延いて其家を主とし、布衣を以て編輯に參せしむ、諸纂修官、稿を以て至る、皆斯同に送りて覆審せしむ、斯同補入參校、能く其實を盡す。元文罷む。之に繼ぐ者、大學士張玉書、陳廷敬、尙書王鴻緒、皆斯同を延き請ひて、禮を加ふる有り。斯同、諸史に詳通し、博識絶倫なり、尤も明代の嘗故に熟し、有明十五朝の實録に於て、

幾んど能く誦を成し、其外邸報、野史、家乘、遍觀熟悉せざる無く、一人一事を擧げて之を問ふに随つて、即ち其の曲折始終を詳述して、聴くに懸河の瀉ぐが如くなりしといふ。斯同を傳ふるもの、錢傳のほか全祖望の萬貞文先生傳あり、又黃百家の萬季野先生斯同墓誌銘あり。大昕は季野の弟子なり、乃ち萬先生傳を作す。

錢傳に記すらく、建文の一朝、實録無し、野史因つて遜國出亡の説有り、後人多く之を信ず。先生直ちに之を斷じて曰く、紫禁城に水關無し、出づべきの理無し。鬼門も亦其地無し。成祖實録に稱す、建文、闕宮自焚す、上、宮中の煙起るを望見して、急に中使を遣はして往いて救はしむ。至れば已に及ばず。中使其屍を火中より出し、還つて上に白すと。謂はゆる中使なる者は、乃ち成祖の内監也、安んぞ肯て後の屍を以て其主を誑かんや。而して宮を清むるの日、中涓續御建文の意を屬する所たる者は逐一に毒すと。考ふるに苟も自焚の實據無くんば、豈肯て大索の令を行はざらんや。且つ建文登極して二三年、親藩を削奪して、曾て寛假する無く、以て燕王の兵を稱げて闕を犯すに至り、逼迫して自殞す、即ち出亡せしむるも、亦是勢窮り力盡くるのみ、之を遜國と謂ふ、可ならんやと。是に由りて建文の書法遂に定まる。

辛楣の記する所是の如し。是即ち季野は建文出亡の事無しと爲すもの也。季野の言、信すべき乎、信ずべからざる乎。黃百家の撰するところの墓志、全祖望の叙するところの傳、及び錢大昕

の爲すところの文とを合せ考ふれば、萬季野は實に其人其學信すべきが如し、其人其學の信ずべきを以て其言を信ずれば、建文出亡の事の無きも亦信ず可きが如し。禁城に水關無く、鬼門も亦其地無しと云へば、道士の舟を購して建文を逃れしむるの事も亦都べて是れ烏有の談なるのみ。嗚呼、我實に萬先生を信ぜんと欲する有つて、而して之を信ぜざらんと欲する有る無し。然れども萬先生に先だつて、夙く既に水關鬼門、建文出亡の談有り、故に萬先生之を排して、其事有る無しと爲せるなり。然らば則ち必ず其事無しと雖も、必ずや函中に僧衣有り、水上に道士を見るの言ありて、而して又其言を造れるの人有りし也。凡そ虚談妄説の、其事當に有るべからずして、而して人をして其事或は有るべきを思はしむるものは、必ず詭謀巧智の人有りて、造言流言の術を用ひ、世俗衆愚をして好んで之を信ぜしむるに出づ。支那の史を讀むに、運移り命革まるの時、多くは神異の事ありて、天意の屬するところあるを示すもの有り。劉季の未だ起たざるや、龍種の名夙く傳はり、貴相の譽數、布く、大蛇斬られて老嫗哭し、彩雲見はれて健婦就く。まことに天命の草野の一英雄に在るを思はしむる有り。蓋し是皆呂公蕭何の輩の爲すところならずんばならず。是天を藉りて人を制するのみ。空を纏り虚を結びて、人をして永樂の帝と爲り、建文の世を遁るるも、皆天命劫運の自ら然るあるを思はしむるもの、燕府帷幄の詭謀巧智の者有りて之を爲すにあらざる無きを得んや。それ人間の是非の、天命の興奪を如何ともする無きや久し。永樂の


興起、建文の窮死、之を天命と爲せば、永樂罪無く、建文徳乏しきに似たり。然らずんば成祖の智勇にして偉器たるも、謀叛構亂、倒行逆施、逼りて天子を死せしむるに至る、滅倫悖徳、非道不義の罪、もとより一世に君臨するに堪へざらんとす。ここに於て建文の遜國歸道、豫め定まれるものの如く、永樂の啓天肇運、當に然るべきに似たるの神異祕奇の談ありて、而して後に民安んじ國治まり、大明の威、内外に耀くを得たり。嗚呼天命か、人謀か、劫運か、世情か。我建文永樂の際に於て、驚く可きの一大小説の燕王幕裏の無名子によつて撰せられたるを記して以て人に贈り、題して運命といふ。史と云はんや、史と云はんや、これ當時の小説を傳ふるのみ。若し夫れ史實の如きは、萬季野これを知る。張廷玉奉勅修の明史の如きは、號びて正史といふと雖も、建文の紀に、宮中火起る、帝終る所を知らずと記し、又其末路を記して曖昧の言を爲すこと多し。これ清の太史にして而して明の小説家の阜隸たるもののみ。吾嘗て曰く、虚言を束し來つて歴史有りと。抛下着。

昭和十三年六月一日第一刷發行
昭和二十三年二月二十日第四刷發行

運命 定價貳拾參圓

著者 幸田露伴
編輯者 布川角左衛門
發行者 岩波雄二郎
印刷者 井關好彦

發行所 東京都千代田區
神田一ツ橋二ノ三 岩波書店
會員番號A一〇九〇〇四號



大同印刷・永井製本

讀書子に寄す

岩波茂雄

—岩波文庫發刊に際して—

眞理は萬人によつて求められることを自ら欲し、藝術は萬人によつて愛されることを自ら望む。當ては民を愚昧ならしめるために學藝が最も狭き堂宇に閉鎖されたことがあつた。今や知識と美とを特權階級の獨占より奪ひ返すことはつねに進取的なる民衆の切實なる要求である。岩波文庫は此要求に應じそれに勵まされて生まれた。それは生命ある不朽の書を少數者の書齋と研究室とより解放して街頭に隈なく立たしめ民衆に伍せしめるであらう。近時大量生産豫約出版の流行を見る。その廣告宣傳の狂態は姑く措くも後代に貽すと誇稱する全集が其編輯に萬全の用意をなしたるか。千古の典籍の翻譯企圖に敬虔の態度を缺かざりしか。更に分賣を許さず讀者を壓迫して數十冊を強ふるが如き、果して其揚言する學藝解放の所以なりや。吾人は天下の名士の聲に和して之を推舉するに躊躇するものである。この秋にあつて岩波書店は自己の責務の愈重大なるを思ひ、從來の方針の徹底を期するため既に十數年以前より忘れて來た計畫を慎重審議この際斷然實行することにした。吾人は範をかのレクラム文庫にとり、古今東西に亘つて文藝哲學社會科學自然科學等種類の如何を問はず、苟も萬人の必讀すべき眞に古典的價値ある書を極めて簡單なる形式に於て逐次刊行し、あらゆる人間に須要なる生活向上の資料、生活批判の原理を提供せんと欲する。この文庫は豫約出版の方法を排したるが故に、讀者は自己の欲する時に自己の欲する書物を各個に自由に選擇することが出来る。携帶に便にして價格の低きを最主とするが故に、外觀を顧みざるも内容に至つては嚴選最も力を盡し從來の岩波出版物の特色を益發揮せしめようとする。この計畫たるや世間の一時の投機的なるものと異り、永遠の事業として吾人は微力を傾倒しあらゆる犠牲を忍んで今後永久に繼續發展せしめ、もつて文庫の使命を遺憾なく果さしめることを期する。藝術を愛し知識を求むる士の自ら進んで此舉に参加し、希望と忠告とを寄せられることは吾人の熱望するところである。その性質上經濟的には最も困難多き此事業に敢て當らんとする吾人の志を諒として其達成のため世の讀書子とのうるはしき共同を期待する。

昭和二年七月

終

